



龕 [がん] 1. 仏像を納める厨子。 2. 棺 (ひつぎ)。— 広辞苑

ニッチ [Niche] (独 Nische) 龕 (がん) とも書かれる。壁体内に掘られ、多く平面半円、半円筒状で、上に1/4半球をいただく凹所。彫像などを置く。— 共立・建築辞典

niche (nich), n. {Fr. niche, from L.nidus a nest} 1. a recess or hollow in a wall usually intended for a statue, bust or vase. 2. a place or position particularly suitable for the person or thing in it. — Webster's New Twentieth Century Dictionary.

工学院大学建築学科同窓会誌
NICHE

Vol.20
1996

NICHE vol.20
 発行.....平成7年4月1日発行
 編集・発行.....工学院大学建築学科同窓会
 東京都新宿区西新宿1-24-2
 03.3342.1211 内線2025
 編集協力・レイアウト.....SCRIPTORIUM
 印刷.....弘報印刷株式会社

NICHE

C O N T E N T S

『NICHE』vol.20 発刊によせて.....高木雅行.....建築学科同窓会会長..... 02

建築学科の近況

都市建築デザインコース.....建築デザイン専攻の近況.....	広沢雅也.....建築学科教授.....	03
都市建築デザインコース.....都市デザイン専攻の近況.....	南迫哲也.....建築学科助教授.....	04
建築学科.....計画系の近況.....	中嶋泰.....建築学科教授.....	05
建築学科.....構造系の近況.....	荻原正三.....建築学科教授.....	06
建築学科.....環境設備系の近況.....	宮沢健次.....建築学科助教授.....	07
建築学科.....生産系の近況.....	宇田川光弘.....建築学科教授.....	08
大学院.....建築学専攻の近況.....	吉田倬郎.....建築学科教授.....	09
	中嶋康孝.....建築学科教授.....	10

大学教育が変わる

開かれた建築学科の研究環境.....渡辺定夫.....建築学科教授..... 11

TOPICS

建築学科同窓会第30期総会開かれる	15
建築学科同窓会臨時総会・懇親会がアトリウムで盛況に開催	
建築学科教員の異動 ほか	
建築学科同窓会運営委員名簿／役員名簿	16

同窓生からの便り

構造設計は楽しみながら.....	児島又一.....	19
最近想うこと.....	小野正.....	20
私のプロ・マネ法.....	櫻田滋.....	21
想いを形に.....	遠藤敏也.....	23

同窓生を訪ねて

沖縄からの発信.....与儀清春氏に聞く..... 25

第29期(1994年度)事業報告／一般会計報告／運用財産目録／財産運用報告..... 34

第30期(1995年度)事業計画(案)／一般会計予算(案)

会誌『NICHE』発行のための編集・発送費、援助金..... 36

工学院大学建築学科同窓会誌『NICHE』発刊のための賛助金のお願ひ..... 38

工学院大学同窓会会員名簿の頒布について

工学院大学校友会STECカード加入のお願ひ

平成7年度建築学科卒業生名簿..... 39

若葉の緑もすがすがしい今日このごろ、建築学科同窓会の皆様方には、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

校友会全国大会

校友会では10月26日に「工学院大学新宿テクノキャンパス落成記念」をテーマに、第12回校友会全国大会東京大会を行います。詳しくは同封のご案内状をご覧ください。当

●『NICHE』vol.20 発刊によせて

21世紀を目前に控え、 魅力ある学園づくりを。

高木雅行 建築学科同窓会会長



日は建築学科をはじめ学園全体のご協力を得て新キャンパスの見学会や、建築学科ではコンペの作品展、写真部OBによる写真展などさまざまな企画が用意されております。建築学科同窓会では2年間大好評でした12月の懇親会を繰り上げて同日に参加合流の予

定です。ぜひご家族でおいでください。

同窓会と校友会

現在、卒業された皆様全員が建築学科同窓会会員として登録されております。そして、皆様の代表として各研究室より推薦された運営委員の皆様が、会長をはじめ各役員を選出し同窓会を運営しております。また、同窓会の会長は自動的に校友会の副会長となり、他にひとり選出された常任理事の方とともに校友会の会長を互選し、校友会を運営しております。同窓会が任意団体に対し、校友会は社団法人です。営利を目的とせず、社会一般の利益を目的とする法人、つまり工学院大学校友会は、教育機関としての学校法人工学院大学に対して協力・援助をする団体です。活性化しつつある卒業生の親睦団体である同窓会に、たくさんの皆様の参加・ご協力を得られた時、楽しい企画に大勢の皆様がおいでになった時、その結果集まった英知やエネルギー、寄付や協賛金が校友会を通して学園の発展に役立てられます。

工学院大学評議員

工学院大学の運営において重要な事項の決定に対しては、評議員会の議決が必要となります。評議員会は52名で構成されており、卒業生からは建築学科をはじめ各同窓会より選出さ

れた20名の皆様が学園の運営に対し議事に参加しております。卒業生の評議員が単に意見を述べるだけでなく、議決権を持つ例は数ある大学の中でまれのようです。いうなれば私たち卒業生は大学のオーナーでもあるわけです。

魅力的な工学院

このように学園の運営に卒業生が参加できる機会があるわけですから、それを利用して大学を外から見た目で意見を述べていただき、そのアイデアをどんどん反映させ、より魅力的な学園にしていきたいと考えております。そうした輝きを放つ学園には向学心に燃えた、エネルギーあふれる青年が集い合い、ますます魅力ある学園になっていくことと思います。そして優秀な学生を大勢排出する母校は、その結果わたしたち卒業生の誇りとなるでしょう。

新しい取り組み

今回「同窓生を訪ねて」にご登場いただいた、与儀清春さんは沖縄で活躍されている同窓生です。工学院大学の同窓生を核としたチームで沖縄県立武道館の実施コンペをはじめ、数々のコンペで本土から参加した大手事務所のあんを退け、次々と勝ち取っております。このほど他大学に先駆けはじまりました、社会的実績をあげられている方が博士号を取得できる新制度で母校へ再入学の予定の方です。沖縄の視点から見た建築論をまとめられる予定だそうです。また、外の視点で見た大学への考えもお持ちのようです。

新宿テクノキャンパスが完成し環境の整った大学が、いよいよ中身の充実を図る時期になりました。21世紀を目前に控え、さまざまな新しいことに取り組み、また魅力的な研究や授業をされる先生方がどんどん現れ、母校がより発展するようにわれわれ同窓会では協力していきたいと考えております。

明治建築分野でも景気の低迷が続く中で、はかばしくない業績の推移を嘆く声ばかり聞こえる昨今ですが、建築学科OBの皆様にはいかがお過ごしでしょうか？

物事の消長や盛衰にはたいがい輪廻というものがあるのが世の常ですので、近いうちにわが国の景気が好転し、建設分野にも明るい日がさしてくると考えるのは楽観すぎるでしょうか？しかし、少なくとも工学院大学を取り巻く近況を入学志

●建築学科の近況

建築学科志願者数はわずかながら増大。 優れた後輩を送り出す体制づくり。

広沢雅也 建築学科主任教授



願者数の変動などからみると決して悲観的な材料ばかりではありません。特に建築学科については従来から他学科にくらべて、多い志願者数も引き続きわずかながらにしても増大傾向にあり、首都圏にある工科系大学の中で中堅として地歩を確固たるものにして

つあるように思えます。こうした中で、1996年度の建築学科の運営には主任として私と望月大介先生、幹事としては統投の遠藤先生に小嶋先生が加わってあたらせていただくこととなりました。私には熱血漢としての印象が強い望月、小嶋両先生の御協力を得て、時機に則した科の運営を心がける所存でございますので、OB各位からの温かいご支援をお願いいたします。新宿校舎が完成し、都市・建築デザインと再開した2部が軌道にのってきた昨今における建築学科の最大の懸案事項は、現在の都市・建築デザインコースを中心とした新学科としての分離独立であり、大学の中でも重要課題として確認され、現実へ向けて慎重に審議を重ねております。

3月19日の卒業式では1部建築学科・建築学コース174名、都市建築デザインコース83名、2部建築学科107名、大学院52名が卒業され、新しくOBとして皆様の仲間入りをするようになります。今年就職状況は昨年と同じく特に女子学生を中心にかなり厳しい状況でしたが、現時点では就職希望者の大多数が就職できたと推定しております。今年の傾向としては、設計や構造などの分野で院卒の募集が増えていること、大企業が減りその分中小企業への就職が増えていることおよび全学的に技術者の人材派遣会社の募集の増加が目立つことなどが特徴として挙げられます。また、これは継続的な傾向ですが、特に建築分野では学生の就職の出足が遅いことも目

立っています。

こうした中で、この4月には1996年度の新入生として1部建築学科に約200人、2部建築学科に約90名、大学院に約50名の新人を迎えます。それに対し専任教員スタッフの陣容は教授15名、助教授11名、講師7名、助手2名の計35名ですが、これに加えて特別専任教授2名、兼任講師59名の総員96名の多数の教師陣により学部学生、大学院院生の教育と研究にあたることとなります。

昨年度は年度当初から新しく専任になられた特別専任教授の石田頼房先生、専任講師の野沢康先生（ともに都市計画担当）および専任講師の久田嘉章先生（構造担当）の3先生を紹介させていただきましたが、年度途中（9月）から建築材料が専門の高英雄先生が専任教授として着任されました。高先生は材料でも特にコンクリ

ートの分野で大変著名な方で、長年竹中工務店の技術研究所を中心に技術畑で御活躍されると同時に、建築学会等でも材料分野の各委員会委員として広く活躍されてきた方です。今泉先生の後任として着任されたわけですが、先生のご着任により生産分野のよりいっそうの充実が期待されます。また、専任教員の中でも昨年は望月大介先生、初田亨先生が教授に、また大橋先生、大塚先生および遠藤先生が助教授にと5人の方々の昇格がありました。1996年度にも何人かの先生方の昇格が見込まれています。

一方、専任教員には退任者はありませんが、永年にわたり客員教授として大きな貢献をしていただいた菊竹清訓先生が1996年3月31日付をもってご退任になられました。また、兼任講師の青山幹先生（生産系）、清家剛先生（生産系）、増沢幸尋先生（計画系）、平井真夫先生（計画系）がご退任になり、かわって藤村盛造先生（インテリアデザイン）、西尾順文先生（建築設計）、橋本久道先生（建築設計）、海谷寛先生（建築設計）、鳥屋部恭通先生（建築デザイン）、小見康夫先生（構造計画）の方々が着任されることになっております。平成8年度の卒業生の就職もすでに動き出していますが、回復基調とはいえず混迷状態にある中で、昨年と同様の厳しさが予想されます。建築学科の場合には従前からOBの皆様がリクルーターとして積極的に後輩の就職活動を手助けしていただいている会社がいくつかあり、われわれ教員としても非常に感謝している次第です。設計事務所の場合など、お知り合いの教員に直接依頼していただいても結構ですので、どうかよろしくお願いいたします。

昨年は耐震対策の講演で各地を回りましたが、沖縄県や山口県、栃木県など各地で、本学OBの皆様が行政部局や建築士会等の幹部として活躍の様子を知り、非常に心強く思うと同時に、優れた後輩を送り出す責任の大きさをひしひしと感じた次第です。

建築学科主任教授に望月大介先生選任される

工学院大学に建築学科が設立されて40年になる今年、建築学科の全教員の投票によって主任教授に望月大介先生が選出されました。望月先生は工学院大学建築学科を卒業されたいわば生え抜きの教授であり、建築家としてもその住宅作品の気品の高さには定評があります。また学内の建築学科デザインコースの創設時にカリキュラムをバランスよくまとめあげた

●建築学科の近況——都市建築デザインコース建築デザイン専攻

コースから学科に向けて検討開始。 設計教育に本学OBの積極的参加。

南迫哲也 建築学科助教授



功績は大であり、今後2年間にわたる主任教授としてご活躍に期待が寄せられています。

デザインコースからデザイン学科へ向けて

工学院大学には9つの学科・コースがありますが、本年度

の入学試験（前期の一般入試）判定では合格点の最高は建築学科建築学コースであり、次点が僅差で都市建築デザインコースでした。したがって都市建築デザインコースも一応社会的評価を得てその存在価値を認められたと考えてよいと思われます。そこでさらにこのデザインという分野を充実させ、社会的にもその存在をハッキリと表現するために、コースから学科へ昇格させることが検討され始めています。建築学教室では基本問題検討委員会とカリキュラム委員会の合同委員会で急ピッチに諸問題が検討され、大学全体の教授総会にも上提され、他の情報工学科の新設といっしょに設立準備室（主任教授を中心）の設置が2月16日の総会において決定されました。名称は都市環境デザイン学科（仮称）として出されましたが、建築デザインの伝統的な工学院大学からすると都市建築デザイン学科とすべきであるとの意見もあります。前者は建築を非常に狭い建物だけを考えるという解釈であり、後者は建築を建物を含むその周辺も含むという考えでしょう。皆様のご意見をお聞かせください。

設計教育と卒業生建築家の協力

デザインコースにおける設計教育は設計課題と並行ますしてプラクティスという授業を行っている。これは基本的な設計手法や表現方法に習熟することと同時に、敷地の観察や技術

的な知識を講義によって補うなど多様な授業内容となっています。デザインの多様性からすると、このような課題をバックアップする授業は効果的であると思われます。現実に提出された課題作品にもこの授業効果が現れ、良い作品の数が激増しています。

しかしこのようなキメの細かい教育を行うには多数のスタッフが必要となります。そこで毎年外来の先生方に助けていただいています。設計教育に携わる専任教員は建築学コースも含めると17名ですが、外来の兼任講師は26名、合計43名のスタッフで行うことになります。そのうち14名の方々が本学の卒業生に参加していただいております。これは実にありがたいことです。つまり学内のことをある程度知っていると同時に、教育の方針についての理解がすでにあるということです。そしてそれを学生に伝えることが自然に行えています。他大学卒業の兼任の先生方は逆に本学にはない新しい面を表明されて、教育の総体としては新鮮で着実な雰囲気をつくりだしているといえるでしょう。今後もOB建築家の積極的な参加をお願いしたいと思います。

コンペティション

最近、工学院大学のコンペの入選が少ないという意見をOBから聞きます。たしかにメジャーのコンペ入選からはやや数が減ったといえるかもしれませんが。その原因は何か、そのためには何に力を入れればよいかなど、いろいろのご意見があるのですが、いまはここではさしひかえるとして、本年は次の7点が入選しています。

フューチャー・オフィス・デザイン・コンペ '95「デザイン
の曖昧性——多様性の時代のデザイン」1等受賞「自由空間
における曖昧性」：北川正仁・小田桐純

'95日本建築学会コンペ全国3等入賞：伊藤秀明

第9回建築環境デザインコンペ「パブリックサービス・プレイス」佳作入選：

北川正仁・柏沼正樹、同佳作入選：寺島由希子・菊池剛史・長谷川昌之

学生のためのフレッシュ・デザイン・コンペ「Gallery in the Gap」
「都市の隙間を埋める」フレッシュ・デザイン賞：西沢晶子

'96Green Design in Yamagata 入選：伊藤秀明

同入選：木下賢一

大学にとっては卒業生が大切です。卒業生が社会の中でどのように活躍されているかがその評価を決定するからです。

建築学科同窓会の皆様には、お元気でご活躍のことと拝察いたしております。都市建築デザインコースも発足して5年を経過し、平成8年3月には第2回目の卒業生を送り出すことができました。

都市系のスタッフを誌上でご紹介いたしますと、中嶋泰教授、渡辺定夫教授（平成6年4月東京大学より就任）、小嶋勝朗講師、石田頼房特別専任教授、野澤康講師の陣容でがんばって

善、地下2階にはアサヒビアケラーなどの飲食店もできたので、ビールで喉を潤すことができました。昨年末には、そじ坊（日本そば）、和食（乃の木）の店も開店し、エステック情報ビルの入居率も満杯の状況になった模様で、これも新宿地区では特記されるニュースではないかと思われます。

八王子校舎では、5号館（中央高速自動車道からも見える）に夜は照明された工学院大学の文字が壁面に取り付けられま

した。（4月1日、文字3m角）

大学の前には地下鉄12号線の駅工事が進行中で、近い将来地下鉄環状線として新宿にまた新しいターミナルが誕生するなど、大学周辺も変転しておりますので、新宿校舎はじめ八王子校舎にもぜひお立ち寄り下さい。

●建築学科の近況——都市建築デザインコース都市デザイン専攻

発足から5年を経過。2回目の卒業生を送り出す。優れた後輩を送り出す体制づくり。

中嶋 泰 建築学科教授



おります。また、兼任講師には東京都の古川講師、多摩都市交通施設公社の加藤講師がおられます。

平成8年度の入学試験も前期・後期とも応募者が多く、昨年を上まわった状況で、建築学科はなかなかの人気があるようです。サテライト入試

の会場が増え、札幌、仙台、富山、名古屋、大阪、福岡の各都市で実施されました。

昨年の1月17日（火）の阪神・淡路大震災はわが国の災害史上最大級のものとなりました。特に都市型直下地震としては前例がなく、その被害の規模、内容は皆様ご承知のとおりです。都市と災害、都市と建築、まちづくりなど、多くの教訓をわれわれに痛感させたことは誌上で語れるものではありません。そして、その後も大きなニュースが多く、サリン事件、内閣改造、住専、そして北海道のトンネル事故などはじめ、地震や津波警報など私たちの日常生活に少なくない話題と感心を誘発させてくれました。

気象的には10年ぶりとかの寒波が日本列島を訪れたことで、例年のない寒い冬を迎え、東京でも雪積を見ました。（小生自身は寒冷都市を勉強しておりますので、寒いことは平気です。しかし、最近では東京を退出して、雪深いいろいろな都市を訪ねることができないので多少ストレスがたまっているようです……）。

また学生たちの就職などについても、工学部の特質から、就職難の時代といわれているにもかかわらず、比較的良好で、全体的には昨年同様と考えられることであり、OBの方々のご協力を今後ともよろしく願いたいと願っております。新宿再開発事業も昨年5月には完成し、広場地下1階には丸

新任教授

平成7年10月から筑波大学芸術学系教授で図書館・医療施設計画を専門とする栗原嘉一郎氏（64歳）を特別専任教授として招聘しました。栗原教授は建築学会作品集委員会委員長（初代）、同設計競技指針作成委員会委員長、表彰制度検討委員会委員長、日本建設業協会BCS賞選考委員会委員等の要職を歴任し、現在は日本医療福祉建築協会副会長、日本図書館

画）に登録した学生数は3年生93名（45%）、1部4年生76名（51%）で3年4年ともに1研究室平均8～10名前後になりました。4年生の就職は昨年同様に厳しい状況が続き、特に女子の落ち込みは昨年以上ともいえます。卒業設計作品では建築学コースの学生のできばえは昨年同様デザインコースの作品に劣ることなく、大森拓真が優秀賞（銀賞）に選ばれ、4名が優秀賞（銅賞）に輝きました。

●建築学科の近況——計画系

建築学科再編計画スタート。 卒業設計の出来栄は良好。

荻原正三 建築学科教授



協会施設委員会委員長、日本病院管理学会評議員を務める活躍ぶりで、建築学科に新風を吹き込んでくれるものと期待しております。

建築学科再編計画スタート
『NICHE』vol.19号でも触れたように、2000年に向けての大学

リストラの一環として、建築学科の21世紀に向けての将来像を明確にし学科構成の再編計画を検討するための再編計画委員会が昨年の暮れからスタートしました。発足以来5年を経過してコース分けの長短等がわかり、受験生の集まり具合や就職状況等がほぼ当初予定の線で落ちつきそうな見通しになってきました。再編計画の狙いは、大学危機・受験生激減時代に先手を打ち、生き残りの戦略を明確に打ちだそうとすることにあります。

再編計画は大橋学長の下で全学的にも取り組まれています。建築学科の計画の骨格は、まず現在の都市建築デザインコースを都市環境デザイン学科として独立させること、また建築学コースを21世紀型の建築学科へと大きく脱皮させることの2本柱を中心に組み立てられることになろう。早期に合意できれば平成9年からのスタートも可能かもしれません。

新宿再開発-デザインコース設置-大学院修士課程拡充-社会人博士制度発足と、この10数年間の一連の関係者のたゆまざる努力の最終段階に入っているとも考えられますが、これからが頂上めがけての胸突き八丁という段階で、最後のひと踏ん張りが必要な時期にさしかかっているとみえるでしょう。

計画系学生

1995年度建築学科の学生が計画系（歴史・建築計画・都市計



構造系の教育研究体制

十代田教授の退任、久田嘉章さんの講師就任で1年が経過いたしました。1996年度も同じ教員体制です。卒業生の稲村さん、竹原さんにも引き続き兼任講師をお願いしております。専任教員8名、大学院生14人、1部卒論生45人、2部卒論生14人、1部専攻セミナー生39名で、教員数に比べ卒論生が少ないのですが、質はともかく研究や卒論は活発です。

●建築学科の近況——構造系

構造系卒業生の学位取得者が増加。 実験設備がよりいっそうの充実。

宮澤健二 建築学科助教授



阪神大震災の震災調査、検証実験などで多忙を極めた1年でした。本学がマスコミにこれほど多く取り上げられたのは前例がありません。本学構造系の真の評価につなげる努力がこれから必要になると思われれます。

近年、大学も研究が優先しがちで、卒論生もゼミ生も教員や院生の研究に引き込まざるを得ず、建築一般の勉学、社会一般教養（お酒・・・）、アルバイトと多忙なようです。もっとも、ときどき構造系の研究室からおでんや餃子、焼き肉の匂いがたぐい、機嫌のいい赤ら顔の先生や学生が25階を徘徊することがあり、けっこうストレスを発散させています。

新学科構想と構造系の行方

都市建築デザインコースを都市環境デザイン学科のようなものにし、2学科体制にする方向で検討されています。

従来の建築学科の全体枠と構造系専攻学生数の減少、同時に専攻色を薄め学生の自由な勉学を勧める方向に向かいつつあります。震災を踏まえた技術者の需要は増加しており、いっぽう構造設計では建設省新構造総プロの行方から見ても、相当の知識が求められる時代です。それらを考えると、社会の要請と一致するか心配です。構造系学生数の減少は、専任教員の努力不足かと気がかりです。

研究が優先すると、学生の広い分野の知識の修得が困難になります。せめて構造の中だけでも広く見ておくことが必要だと思われれます。構造設計、研究所、施工現場、工場生産の見学に卒業生の協力をお願いいたします（1995年度は3回実施いたしました）。

学生と就職

耐震診断や耐震設計の重要視がささやかれながら、学生の就職には直結しませんでした。寝食を忘れての震災調査や実験研究への尽力が、本人の望む就職にならなかった人もいましたが、7月ころには全員決まり、この不景気にしては善戦しましたし、このところ需要増の明るい兆しも見えてきました。

ニュース（この項望月教授記）

1. このところ構造系卒業生の学位取得者または予定者が少しずつ増え、次の方が取得していることが確認されています。

福原正志：高強度鉄筋を用いたRC梁の研究（1963年卒業）

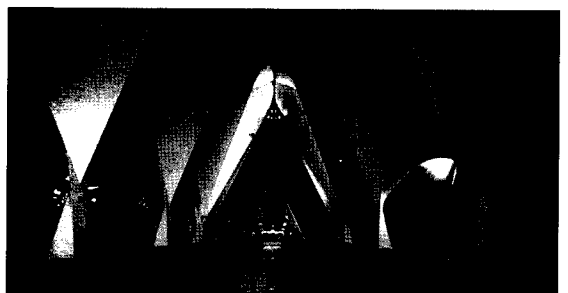
中村孝明：海洋構造物の応答特性の研究（1979年卒業）

宮澤賢二：木質面材耐力壁の耐震性の研究（1967年卒業）

2. 文部省の補助金を受け、動的地震荷重を再現できるジャッキシステムが構造実験棟に設置されます。老骨はともかく若い院生、卒研生に期待しています。

3. 1960年代の構造エンジニアや学生に夢を与えたFelix Candelaの展覧会が1996年3月に開催されました。これに協賛し、院生とセミナー生がミラグローサ教会の構造モデルを製作、八王子11号館前に展示されています。

上：木造住宅の実大振動実験風景。香川県多度津で6棟実施。
下：フェリックス・キャンデラ設計のミラグローサ教会。これは実物の写真。モデルが八王子キャンパス11号館の前に展示されている。



環境設備系の研究室は変わりなく、中島、水野、足立、大橋、宇田川の5研究室ですが、水野教授は教務部長、中島教授は日本太陽エネルギー学会会長をそれぞれ務められ、本来の教育研究に加え、学園内外でも活躍されています。教育・研究施設も変わりなく、研究室は新宿校舎高層棟24階の北半分の中島研究室、水野研究室、宇田川研究室が演習室、計測準備室、八王子教員室、大学院生室などとともにあり、八王子校

1部では3年進学時に専攻を選択します。ここ2年ばかり30数名でやや希望者が減少した感がありましたが、平成8年度の希望者は40名を越えました。卒業研究の人数は、Aタイプ（前期論文、後期卒計）10名、Bタイプ（通年卒論）24名、2部は12名でした。環境設備を専攻する女子学生も着実に増加しており、今年度の卒業生では1、2部合わせて8名を数えています。2割近くが女子学生になったわけです。

●建築学科の近況——環境設備系

教育カリキュラムの改定で授業の充実。 より盛んになった実験・研究。

宇田川光弘 建築学科教授



舎に足立研究室、大橋研究室、環境実験室、設備実験室、音響実験室があります。地下2階のプレファブの実験室も健在で、環境設備実験の授業および卒業論文、修士論文の実験にも使用されています。八王子実験施設の管理運営は高信助手および学生職員ひとり

があたっています。新宿校舎ではコンピュータシミュレーションや計測データの処理、実験は八王子校舎の実験施設というようにそれぞれの施設を使い分けています。このほかに、ソーラーハウスやコ・ジェネレーションシステムなどの実在の建物についての実測研究も相変わらず盛んです。

大学改革の議論が盛んですが、工学院大学でも学部教育のカリキュラムが、1部については平成7年度入学生から、2部については平成8年度から改訂されました。改訂の焦点は一般教育科目の修得に大きな自由度を持たせるいわゆる大綱化ですが、これに合わせ建築学科の専門科目も改訂されました。1部ではこれまでの科目は環境工学第1～第3、設備計画第1、第2、設備基礎理論第1、第2、給排水衛生設備第1、第2、空気調和設備第1、第2、電気設備、設備設計第1、第2、設備実験でしたが新しいカリキュラムでは環境工学、環境計画、給排水衛生工学、空気調和工学、空気調和システム、電気・情報システム、環境・設備設計、都市設備、環境設備解析法、環境設備計測法となりました。改訂に伴い都市建築コースのカリキュラムにも環境設備系科目がかなり組み込まれました。2部については多様な教育ニーズを持つ学生に対処できるよう専門科目全体が全て選択科目になりました。環境設備系の科目は環境工学A、B、給排水衛生設備、空気調和設備、電気情報設備、設備計画・管理、設備設計法の7科目です。

卒論のテーマの分野は次のとおりです。ソーラーシステムシミュレーション、住宅熱負荷特性、ソーラーハウス性能評価、蓄熱システム、対流放熱器、放射対流放熱器、空調吹き出しシステム、エアフローウィンドウ、リニューアブル、コジェネレーションシステム、有限要素法による音場解析、ダクト系消音、室内照度、換気・空気質、PVシステム、阪神大地震設備被害調査、大気放射冷却。大学院についても7人の学生が修士課程を終了します。ペリメータレス空調の簡易化とその適用性、建築環境システムと大気放射、熱核式土壌蓄熱をもつソーラーハウスの性能解析、電力・熱負荷のデータベース化、実負荷を用いたコジェネレーションシステムの年間シミュレーション、対流型放熱器の放熱特性、シミュレーションによる住宅のエネルギーシステム評価が修士論文のテーマでした。

建築環境、都市環境、地球環境など環境に関連する問題は重要であることが広く認識されるとともにますます多岐にわたってきました。さまざまな環境の分野で、学園の内外でそれぞれ大いに活躍したいと思います。

この1年は、生産系にとって例年になく話題の多い年でした。まず皆さんご報告したいのは、去年10月に髙英雄先生を今泉先生の後生の教授としてお招きできたことです。髙先生のご専門はコンクリート工学で、特に流動化コンクリートの開発研究の第一人者としてよく知られています。髙先生は、昭和39年に東京大学をご卒業され、大学院修士課程を経て、竹中工務店に入社されています。竹中では、主に技術研究所でコ

●建築学科の近況——生産系

系の充実に実りあった1年。 教育指導体制がいちだんと充実。

吉田倬郎 建築学科教授



ンクリート工学を中心とする建築材料研究に就かれています。その間、インテリジェントシステム本部長という先端技術分野の実務や阪神淡路大震災の復興関係の要職なども担当されています。大手建設会社でのこうした実務を踏まえた、今後の本学教授とし

ての教育研究部分野でのご活躍が期待されています。

難波先生は、2年間の学科主任を終えられ、本来ならば少々息を抜くべき平成7年度だったはずでしたが、結果的には阪神淡路大震災関係の仕事にご活躍されることとなり、総合研究所のプロジェクト研究「阪神淡路大震災の被害と復興に関する研究」の代表者としてご尽力されています。また、(財)住宅・木造技術センターを事務局とする木造軸組工法住宅の耐震実験が、原子力発電技術機構の多度津工学試験所の世界最大の振動台を用いて行われましたが、外装関係担当の委員としてご活躍され、その様子の一担はテレビで広く報道されています。なお、この実験全般については構造の宮澤先生が主要委員としては、ご尽力されています。難波先生は、このほか例年のようにセメントモルタル関係の研究での海外出張も多く、本当にご苦勞な1年を過ごされたことと思います。遠藤先生は、本学にいらして3年目になりますが、去年4月に助教授に昇格されました。また学科の幹事として忙しい年を過ごされました。建築学科の教育研究および学科運営に関わるさまざまな仕事と、主任との補充として処理されるわけですが、時間をとられる役割でご苦勞様です。研究面では、国内外のプロジェクトマネジメント、コスト問題、工事仕様書などの調査研究、過疎地域における町おこしの研究、東西アジアの住宅生産の研究などを幅広く展開されています。幹事

の仕事に追われながらの研究教育が楽でないことは当然ながら私も経験していますが、本学の仕組みや雰囲気把握するには、よい機会でもあり、当然のご苦勞が今後の飛躍に生かされることを願っているところです。

私もこの1年は例年のような仕事に震災関係の調査が加わり、忙しく過ごすこととなり、震災調査として私が直接手掛けたのは、グレーチング、石張り、面屋根ですが、それぞれ関係者とともに被災地に赴き、目を覆うばかりの惨状を実感してきました。このほか木造住宅生産供給、工業化構法、耐用設計法、評価法等の研究についても、この1年それぞれの展開がありました。現地調査や現場調査も相変わらず多く、院生や卒論生諸君にもできるだけ参加してもらっていますが、全体としては例年にくらべ学生諸君とつきあう時間が少な目だったのではないかと反省しています。

生産系の卒論生諸君については、今年は例年に較べ着手率がやや低かったようです。着手した諸君についていえば、例年のように元気の良い好青年揃いだといえます。就職動向については、昨今の厳しさの中で、生産系に関しては建設会社や住宅会社を中心にほぼ順調だったように思います。学生諸君を含む生産系のイベントも、卒論や専攻セミナーの合同説明会、卒論の中間発表会と本発表会は、例年のように行っています。また、研究室がお互いに近いこともあり、大学院生も交えた横の交流も活発な年だったように思います。大学院については、この数年院生も増加し活性化していますが、平成8年度からは髙先生と遠藤先生が大学院主要科目担当者に就く運びとなり、生産系の指導体制がいちだんと充実することとなります。これまで生産系の院生はせっかく生産系に進学したのに、他に2科目以上他系の科目を取る必要があったのです。大学院で広く学ぶことは良いことですが、現実には生産系の院生に少々、不便をかけていたわけですが、これが改善されることは、たいへん喜ばしいことといえます。

このように、この1年は生産系にとって、多忙の一方で、系の充実について実りある年だったといえます。しかしながら、社会のニーズ、学生諸君の要望の対応という面からは、まだまだ十分とはいえず課題が多いと思っています。

昨年に引き続き、大学院建築学専攻の近況をお知らせします。

入学生数

修士課程は平成6年度50名、平成7年度45名、平成8年度50名とほぼ毎年50名の水準で推移しています。平成8年度は博士後期課程4名（うち社会人入学者2名）が入学予定。

また、入学生のうち本学出身者以外の人数は平成6年度から6

名である。なお、社会人学生の学費は30%が減免されることになっています。

平成8年度から新たに担当教授になられた先生方

博士後期課程 初田 亨先生（近代建築史特殊研究）
修士課程 宮城千城先生（医療施設計画特論）
安原治機先生（計画情報特論）
宮澤健二先生（木質系構造特論）
髙 英雄先生（コンクリート工学特論）
遠藤和義先生（生産システム特論）

●建築学科の近況——大学院建築学専攻

社会人入学制度が認可。 コンペに多数入選。活況を呈す。

中島康孝 建築学科教授



人・4人・5人で、そのうちの外国からの留学生は平成7年1名（中国）、平成8年1名（韓国）、3名（中国）でした。

コンペ入賞者

建築学会競技設計全国入選をはじめ平成5・6年度の入選件数は20件を越える勢いで活況

を呈しています。そのうち平成7年度は、6種類のコンペで1等など入選しました。北川正仁（2年）と平成7年度日本建築学会全国入選の伊藤秀明（1年）の両君の作品は平成7年度工科大学大学院生優秀論文として表彰を受けております。

武藤章賞

故武藤章名誉教授を記念して修士論文（作品）計画設計部門の最優秀者に贈られる武藤章賞（金賞）は本年度、鈴木邦典：「J.スターリング歴史的文脈に対する設計手法——上野東京国立博物館増築プロジェクトへの転用」のユニークな作品に決定しました。

社会人入学

平成7年度から認可された社会人入学制度は、昼夜開講制により社会人が企業などに勤務しながら勉学に励み、修士または博士の称号を取得できる制度で、今後積極的に推進することとなっています。これに伴い10月にも入学できるシステムとなっています。建築学専攻でもこの新制度を大いに活用していきたいと考えております。同窓生の皆さんにも、この新制度を活用して高度の専門知識・能力をもって技術者としての修士・博士の称号に挑戦されることをお勧めします。平成8年度のこの制度による入学生は、修士課程1名、博士課程2

”

開かれた建築学科の研究環境

建築学科教授
渡辺定夫

● — 大学教育が変わる

◎◎大学院社会人特別選抜——博士課程について

今 年度、平成8年度から、本学建築学科は新しい入学選抜制度を発足させた。それは、従来から一般的に実施されていた、社会人特別選抜についてである。社会人を大学が受け入れること（主に大学院課程である）、それ自身も新しい制度であるが、ここ数年来、かなり全国的に普及してきている。社会人が身分をそのままにして大学で再度勉強ができるためには、職業と学業にそれぞれ専念する義務を両立させなければならない。それぞれに固有の専念義務があり、これまではどちらかを選ばねばならなかった。社会人が大学で勉強しようと思えば、勤めをやめるか、一時休職して大学に籍を置く以外方法がなかった。社会人特別選抜とは、そうした問題を取り除き、社会人の自己能力再開発・向上、さらには生涯学習へ向けて、大学が社会に大きく開く条件を遅ればせながら整えたことを意味している。

大学院後期課程、博士課程は独自の研究を進め、それを成果としてまとめて、いわゆる学位請求論文を作成する課程である。論文は、学位授与権をもつ大学の厳正な審査と公開発表を経て、合格となれば博士の学位が授与されることになる。今日の常識によれば、かつてのような学の蘊奥を極めた末に授与される学位ではなく、いわばその専門研究領域で一人前の研究者として認められた称号であるにすぎない。かといって決して軽々しい学位ではない。なぜなら、それぞれの研究領域では日進月歩の勢いで成果が積み上げられているので、研究者間の競争に打ち勝って一步前に進めることは、容易に達成できないものなのである。

こうした研究遂行を能率よく効果的に行うためには、強力な支援体制がなくてはならない。遂行できる環境が準備されている必要がある。これこそ大学の務めである。研究に必要な設備、環境、就中指導、協力体制の人的充実是不可欠の支援体制である。

◎◎建築学の設計教育

わ が国の建築学科は、明治以来工学部のなかに位置づけられてきた。もちろん芸術としての建築であるから、造形、芸術の分野に学科が設置される場合もあるが、少数である。どこにあらうが、造形芸術的側面について、程度の差はともかく、教育の柱になっているのが普通である。製造業の中心的存在である機械工学や電気工学でさえ、近頃は芸術的感覚を重視する意見、たとえばデザイン教育をすべきという意見も少なくない。人と物の関係のなかに普遍的価値として本来美しさがあるとすれば、物づくりの本質的部分に美しさの観念がなければならなくなる。まして工学教育の基本は設計にあるのだから、設計教育にそういった要素を十分取り入れておくことは大事であるという認識が強まってきた。

建築は伝統的に建築美を重視してきたものだから、最近はややもすると偏重さ



れる傾向があるにせよ、設計の成果の大きな柱となっている。それに比べ、他のエンジニアリング学の設計をみると、少なくとも学部教育では設計という講義や演習が極端に減っている。製造業では設計チームが企業として行うもので、一人格がすべてを律するわけではないのは当然である。一品生産が少ない以上、製造過程そのものが重要であればあるほど、最終成果物をイメージし、物づくりの設計をひとりで行うことは至難の業であろう。

幸か不幸か、建築は設計を重視している。しかも、個人の能力を評価する傾向が強い。過去5,000年来同じことをやっているといわれればそれまでであるが、建築設計者——建築家とも呼ぶ——が、その職業は極めて古いものである。建築設計に美しさが要求されるにはそれなりの理由がある。他に比べて際立っていることが要請されたからであるが、権力者や飛び抜けた金持ちが発注するから成り行きとしてそうなるのは当然である。そのほかの建築は概して右へならうもので、建築とその集まった都市空間は、人間的な美しさが評価尺度に定着することになる。

◎◎建築工学の発展

方、近代建築は他の工業製品と同じように製造され得るもの、とい——う見方がある。全体はともかく、部分的には材料も含めてそうになっているから、特に現代建築は、観念上の問題としてより事実として工業の産物である。内部環境のコントロールにしても、多くの場合利用者のニーズに合致するように人工環境がつくられる。そのためにさまざまな機器、水、エネルギー源が用意される。自然を巧みに利用して生活することを捨てた以上、そうせざるを得ない。

こうした建築空間システムをつくり、より望ましい方向に向かわせるためには、それなりの工学的研究と成果がなくては成立しない。この半世紀の間、災害に強い建築、快適人工環境の備った建築、安全で合理的な建設方法、部位の要求性能を満たす材料の開発、特に超高層建築の出現以来、建築工学の進歩発展には目覚ましいものがみられた。

最近では、資源、エネルギー多消費型の社会構造が問題視されている。特に建設業は全産業のなかで多消費の代表とされるばかりでなく、建築空間が消費する資源エネルギーの割合が増えるにつれ、省エネ建築、長寿命建築のあり方が大きな話題になってきた。25年で経済的寿命がきたからといって、再開発すればよいとする価値観に危険信号が灯りはじめたのである。

都市は建築をはじめとする多くの施設の集積でできているので、省エネ、省資源ということが求められれば、単に建設するというより全体の社会的ストックを運営管理する、つまり長期にわたって安全、快適空間と施設を維持する必要が生まれる。

物理的に長寿命であると同時に、性能劣化を防ぎながら取り替え修繕を効率的

に行う方法、そうしたソフトウェアも必要になり、大きな研究課題となってきた。阪神・淡路の大災害はこうして技術開発の重要性を、ソフト、ハード両面で求めたものといえる。

建築工学は設計や生産の基礎であるが、建築空間の物づくりの側面、仕様や性能要求に対応する解答を用意し、より新しい開発を行うだけでなく、建築空間の利用技術の側面について、時代の要請に答える開発も視野のなかに入れつつある。

◎◎社会的な意味を持つ建築技術

こ のように建築を見ていくと、建築の存在は人間的で美しいと同時に、社会的に正当性をもってあるものだということが分かる。建築を地域社会のなかに生み出していく仕事は広い意味で建築技術である。そのことによって建築は社会的性格の強い技術といわれる。建築生産の中心的技術である設計は、したがって人間生活に密着しているからという理由以上に社会的に公正さを保つことが要求される。建築設計業務が法律によって定められ、建築士の資格が法的根拠をもつ理由もそこにある。

建築士法が制定されたのは、敗戦後の荒廃し焼土と化した昭和25年、今から45年前のことである。戦後の復興という熱い志がその背景にあったとはいえ、設計業務の独占を建築士に与えると同時に、必要な知識と技能の向上を、法は求めている。その結果、業務を誠実に履行し建築の質向上が図られているのである。建築士は常に建築学の進歩発展、新しい技術やその成果を吸収し、設計業務に反映する義務を持つものといえる。

建築の場合、技術やノウハウは比較的開放的であるが、今後の国際化を見通すと、知的所有権の問題として価値がつけられる傾向にある。知識を獲得することは、今日の実務上、さほど困難なことではないかもしれない。しかし、建築士が成果を社会に還元するに際し、新しい視点や価値観を技術を通して具体化する必要はいっそう強まるはずである。新しい知識に裏付けられた技術が設計業務の信頼性を支えているからである。

建築の教育と研究は、主に設計、生産技術に提供する知識を生産している。一度実務に携わり経験を積んだ建築士が、再度大学という知的環境のもとに身を預け、新しい知識の吸収と研究に時を費やすことは、大きな意義をもつものといえる。

従来の大学は、あまりにも学校教育、学生の教育に偏重し、技術者の新人生産に務め過ぎた。これは、今後とも第一義的に重要でないことではあるが、これからの大学、特に建築教育は、新人と経験を積んだ社会人が共存する場であるべきだろう。なぜなら、新人は経験から多くのものを学び取るだろうし、また、リカレントする者は知識の新しさを享受するからである。

本学科のある新宿キャンパスは、新鮮な知識と重厚な経験とが交流する環境と

して絶好の場である。

◎◎社会人特別選抜と建築士会の推薦

建 築士は社会的技術者という性格が強いと述べた。個人の資格であり、設計など業務を排他的に且つ誠実に行う人格である。したがって、建築士は自ら品位を保持し、設計など業務の進歩改善に努めるべく、建築士会、同連合会を組織している。各都道府県単位に建築士会が設けられ、全国組織は連合会である。

建築士は個人の資格によって事務所を設け実務を行うことができるので、必ずしも製造業のように大きな企業でなくとも業務はできる。むしろ古来から、自由業の技術者として社会的に認知されてきた。欧米のように個人の自由業、独立職業人としての伝統が強い地域では、いわゆる個人事務所が普通であった。近年それが崩れ始めているとはいえ、誇り高い職業人としての意識は何れの地域でも高い。

建築士会は、必ずしも自由で誇り高い職業人だけの集団ではない。むしろ広く建築生産に携わる技術者の地域別集団である。そうした人々の集まりである建築士会は、会員である建築士の技術や知識に依存する業務の進歩改善の指導を行う。と、法に記ってあるものの、実現することは、いうは易く容易ではない。技術、知識の進歩やそれに関する情報が繁多を極めるとき、自己能力の開発を意図しようとする者のために、建築士会がそうした指導や環境のすべてを備えることは不可能である。こうした会員の意欲を高め引出し、しかるべき場を別途設け、送り出すことが方策として自然である。そうした方策のひとつとして、本学科は建築士に社会人特別選抜の道を開いたのである。他の学問分野なら自分の属する企業等の推薦をもって、受入条件としているが、建築個有の技術、社会性という意味で、建築士会の推薦が重要でかつ妥当と考えたのである。いづれにせよ、大学と職業の垣根を取り除くことに大きな意味がある。

具体的にいえば、一級建築士であって、建築学の特定分野について研究意欲があり、建築士会会長の推薦を受けた者のうち、建築士会連合会に設置された専門別業績評価審査会が建築士として研鑽の上に築かれた業績を公正に評価し、口頭試問を加え、大学院後期課程受験にふさわしい者を選び推薦するものである。ちなみに、平成8年度は建築士連合会会長より2名の社会人特別選抜対象者が推薦されている。そのうちのひとりとは本学科の出身である（p.25「同窓生を訪ねて」参照）。

終わりに建築に職を奉ずる同窓生諸君の新たなる行動を期待し、開かれた学科の状況説明としたい。

建築学科同窓会役員

会長

高木 雅行

副会長

宮崎 勝

谷口 宗彦

岩田 俊二

柴田 卓次

幹事

亀山 幸生

西尾 順文

佐藤 保広

静賀 正樹

大野 寛

監査

倉持 道夫

高信 碩文

会計

南雲 正博

会計補佐

古森美佐枝 (院生)

校友会評議委員

校友会副会長

高木 雅行

常任理事

谷口 宗彦

理事

宮崎 勝弘

岩田 俊二

柴田 卓次

亀山 幸生

西尾 順文

笹原 克

評議委員

神前 健 (昭和34年卒)

安原 治機 (波多江研究室)

初田 享 (武藤研究室)

戸沢 正法 (武藤研究室)

田野辺幸祐 (山下研究室)

牛島 明 (南迫研究室)

秋山 覚 (望月大研究室)

静賀 正樹 (望月大研究室)

武田 昌宏 (谷口研究室)

南雲 正博 (谷口研究室)

村山 浩一 (大庭研究室)

瀬戸 信幸 (中嶋泰研究室)

中嶋 耕 (山崎研究室)

佐々木秀史 (初田研究室)

坂上みつ子 (荻原研究室)

東 隆夫 (宮城研究室)

望月 大介 (平岡研究室)

中尾 務 (安原研究室)

前田 尚高 (東研究室)

赤池 正幸 (正木研究室)

桐林 英夫 (十代田研究室)

小野里憲一 (望月洵研究室)

田畑 健 (宮沢研究室)

飯島 敏夫 (今泉研究室)

小野 正 (難波研究室)

小林 信男 (吉田研究室)

櫻田 滋 (中島康研究室)

竹村 明洋 (大橋研究室)

高信 碩文 (水野研究室)

金澤由紀子 (水野研究室)

石田 健一 (宇田川研究室)

建築学科教員の異動

新任 (1995年度後期)

専任教授

嵩英雄 (生産系) 1995年度後期

特別専任教授

栗原嘉一郎 (計画系) 1995年度後期

新任 (4月1日付)

兼任講師 海谷寛 (計画系)

兼任講師 鳥谷部恭通 (計画系)

兼任講師 西尾順文 (計画系)

兼任講師 橋本久道 (計画系)

兼任講師 藤村盛道 (計画系)

兼任講師 小見康夫 (生産系)

退職 (3月31日付)

客員教授 菊竹清訓 (計画系)

兼任講師 平井真夫 (計画系)

兼任講師 増沢幸尋 (計画系)

兼任講師 青山幹 (生産系)

兼任講師 清家剛 (生産系)

兼任講師 磯根正行 (共通)

パート職員 軽部寿朗 (構造実験室)

主任教授

広沢教授 望月 (大) 教授

幹事

遠藤助教 小嶋講師

八王子幹事

大塚助教

学生主事

木村講師

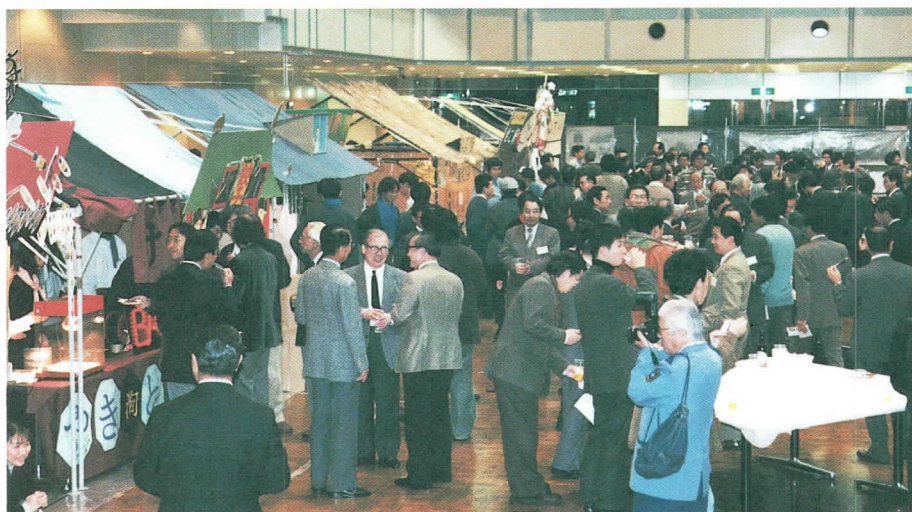
研究室移動

谷口助教

新宿校舎2615室→八王子校舎3306室

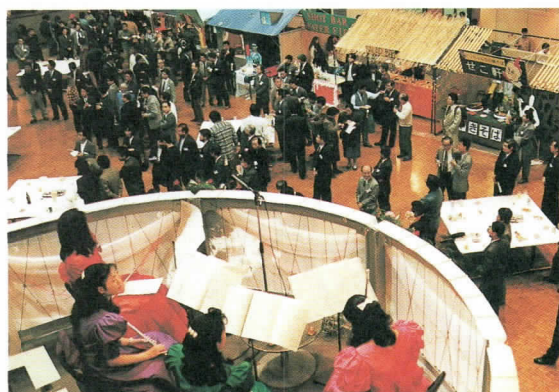
小嶋講師

八王子校舎3306室→新宿校舎2611室



建築学科同窓会1995年度臨時総会・大交流懇親会が新宿校舎アトリウムにて盛況に開催される

建築学科同窓会1995年度臨時総会・大交流懇親会が、去る12月2日(土)に新宿校舎1階のアトリウムにおいて盛大に催されました。臨時総会では建築学科同窓会役員の改正および校友会評議委員の改正が承認されました。臨時総会に続いては大交流懇親会が行われ、



招待者、同窓生、準会員(学生)を合わせて300名近くの方々に参加いただきました。今回も研究室が出店する屋台村が大好評で(前回出店の研究室数より2研究室増)、多数の学生の皆様の協力により楽しく開催することができました。また、ゲームやクラシック、軽音楽の生演奏やコンペの受賞作品の展示も同時に行われ、前回以上の盛り上がりを見せ、同窓生同志、同窓生と在学生の親睦も図られました。

今回より、この懇親会を閉会した後、ほとんどの研究室が忘年会を行いました。同窓会と研究室のそれぞれの親睦の催しが同日開催するというので、どちらも出席者の増加に相乗効果があったようです。

同窓会準会員への援助

在学生(本学学部生および大学院生)を対象にコンクール等への参加を促し、デザイン活動を活性化させる目的で、設計および論文等のコンクール活動への援助として1課題あたり1万円の材料費を援助しています。応募された作品は同窓会講演会・懇親会等での作品展に出品いたしました。昨年度は3月31日現在で75名が各コンクールに応募し、多数の学生が入賞しました。資金については毎年同窓会より予算計上とともに同窓会会員の方々にも援助活動にご賛同いただき賛助金をお願いいたしたく、よろしくご協力お願いいたします。

主な入賞者

●第3回フューチャーオフィスデザインコンペ'95
「Designの曖昧性—多様性の時代のDesign」

1等 北川正仁(大学院2年) / 小田桐純(大学院1年)

●第6回学生のためのフレッシュデザインコンペ
フレッシュ賞 西沢晶子(学部4年)

●第9回建築環境デザインコンペティション「パブリック・サービス・プレイス」

佳作 寺島由希子(大学院2年) / 菊池剛史(学部3年) / 長谷川昌之(学部3年)

佳作 北川正仁(大学院2年) / 柏沼正樹(大学院1年)

●1995年度日本建築学会設計競技「テンポラリー・ハウジング」

全国入選 3等 伊藤秀明(大学院1年)

●'96 GREEN DESIGNING IN YAMAGATA「グリーンデザイン(地球環境にやさしいデザインeye)」

入選 伊藤秀明(大学院1年)

入選 木下賢一(大学院1年)

同窓生からの便り

同窓生からの便り

構造設計は楽しみながら

児島又一 ●佐藤総合計画/1969年卒業



児島氏が構造を担当した「東京国際展示場（東京ビッグサイト）」。



建築学科に入ったのは、華々しい建築デザイナーを夢見ていることですが、建築の知識を得るにしたいが、構造のおもしろさに惹かれ、構造系の科目を主に選んで学びました。

昭和44年3月に卒業し、構造事務所に1年ほど勤めた後、今の佐藤総合計画（旧佐藤武夫設計事務所）に入社しました。公共施設の設計の多い事務所で、主に病院、学校、庁舎、文化会館を手がけています。入社以来構造部に在籍し、現在も構造の設計から監理まで携わっています。25年以上も同じ仕事を続けているわけですが、いまだに設計の難しさに頭を抱え、一方で楽しんでもあります。

構造の仕事は、意匠系に比べて地味なところがありますが、人びとの建物に対する興味や要求度の高まりにつれ、また周辺技術の進歩によって必然的に多様化してきているといえます。建物形態を面白く緊張感をもたせたり、安全性や耐久性を高めたり、また快適さを求めるために構造設計者の参画の場が増えてきています。

事務所として競技設計に応募する機会が多くありますが、オリジナリティのある技術提案が当選の決め手になる場合が多

くあります。各応募作品はアイデアを凝らした力作が出るわけですから、落選することのほうが多いのですが、落選したときに「よその事務所より技術的に劣っていたから落選したじゃないか」と迫られると、内心ニヤリとさせられます。構造の担当者だからといって、いつも構造設計のサイドから建物をながめ、安全性のことばかりいつているのではなく、その建物に何が売り物なのか、たえずトータルなバランスを計りながら設計を進めることが大切であると考えています。さて、1年たった今も新しいニュース、阪神・淡路大震災について触れないわけにはいきません。震源近くで私が関係した建物が10棟ほどありましたが、小破が1件、あとは軽微な被害を受けました。

これらの建物を見て廻って感じたことは、「構造上の弱点は確実に損傷を受けた」ということで、甘えたもののいい方をすれば、「地震動は弱点をけって見逃してはくれなかった」ということでした。エキスパンションジョイント部の納まりの拙さ、短柱、建物全体ネジレによる影響等によって損傷を受けました。雑壁（RC造の間仕切壁）はネジレを起こさせるなど悪いほうへ作用していました。

これらの被害は構造計算で細かに数値を追わなくても、注意深く構造バランスをみれば避け得たことでした。

常日頃思っていることですが、構造設計は伏図と軸組を眺めてみて、壁や柱の配置に極端な偏りがなければ、設計は8割がた完了したとしています。

また、地盤状況、構造方式、構造材料、仕上げ材を含む2次部材などの組合せはどのようなものが最適か、このあたりの選択が設計のポイントと考えています。

今後は阪神・淡路大震災の教訓から、幹線道路に面した建物、密集度の高い街区の建物は耐震性能を高めるとか、建物の位置する環境も考慮していくつもりです。

最後に、私が関係し、4月より使用開始となる建物の紹介をさせていただきます。建物名称は東京国際展示場（東京ビッグサイト）、建設場所は東京都江東区有明3丁目、用途は会議機能を持つ展示場です。施設は、敷地面積24万㎡、延べ床面積23万㎡の規模で、約8万㎡の展示面積、それらをサポートする補助施設、また国際会議に対応できる大小18の会議室のある複合施設です。90m角の大屋根をもつ6つの展示場、45m角の2層の展示場、幅45m長さ280mのガラス屋根のギャラリー、4カ所の組柱に支えられて空中に浮かぶ会議棟が代表的な建物です。

大きな建物群を秩序づけ、基本的な骨組みを形成するために、敷地全体に45mグリッドの軸を想定し、その交点を基準座標としています。3mを単位とするモジュールの導入により、設計から施工までの合理性をよくしています。

▶同窓生からの便り

最近想うこと

小野 正 ●清水建設技術研究所/1976年卒業



今の仕事

建築学科難波研究室でお世話になったのは、20年前である。あれから20年、清水建設技術研究所に勤務し、建築外装の耐久性の研究、内外装構法の研究開発、建設分野における高分子材料の利用の研究開発などを行ってきた。

昨今の技術分やの話題は、変革の時代を反映して多様であり、地震、環境、環境共生建築、生態系保全、緑化、リサイクル、リノベーション、情報化、インターネット、価格破壊、CALIS、品質・PL法、自動化施工、海外進出・国際化などである。バブル崩壊後の不況に伴う厳しい研究開発環境の中で、将来のゼネコンのあるべき姿を視野にいれつつ、上記のテーマにいかに取り組みかが重要課題になっている。

阪神大震災

1995年1月17日に発生した兵庫県南部地震による被害は、死者6,000余名、家屋の損害40万棟であり、未曾有の大災害となった。関東大震災規模の地震でも大丈夫といわれていた土木建築構造物が、損壊・倒壊し、日本の耐震構造物の安全神話をもろくも崩壊させた地震でもありました。テレビに映し出された凄惨な災害状況と、現地調査で目の当たりにした崩壊・倒壊の状況は、建設会社の研究所に勤務する者として大変ショックでした。「天災は忘れた頃にやってくる」という教訓があります。これは、夏目漱石の『我が輩は猫である』の水島理学士や『三四郎』の野々宮さんのモデルになった東京大学の地球物理学者で随筆家の寺田寅彦が関東大震災の経験から残した言葉である。たしかに「天災は忘れた頃にやってくる」ものであり、そしてその時を迎えても人命、財産を守る建築土木構造物を建設していくこと、また数多くの建

築ストックの耐震性を確保していくことが重要であると考えている。

情報化社会

新聞雑誌を見ていると、情報化、情報ネットワーク、マルチメディア、インターネット等の言葉が氾濫している。そして、昨年マイクロソフト社のWindows95が爆発的な人気を博し、また世界を結ぶインターネットのユーザーが確実に広がり、情報化新時代の幕が開けたとって過言ではない。

企業の中では、パソコンひとり1台の時代を迎え、近いうちに家庭にも備わるようになると思われる。パソコンどうしを繋げ、情報の行き来をすることをネットワークと呼び、あるエリアを繋げることを「LAN (Local Area Network)」という。この世界中のネットワークを特定の決まりに基づいて干すとコンピュータなしで結びつけたのが「インターネット」であり、電話回線を通じて自由に情報交換できる。私のところでは数年前からネットワークの整備がはじまり、昨年初めからは電子メールとインターネットが使えるようになった。

インターネットは、販売、情報サービス、学校・会社紹介、求人などさまざまなところで使われはじめている。われわれ研究者としては、多様な情報を収集して的確なニーズ把握を行い、利用価値や貢献度の高い研究開発の水深と成果品の展開などに利用したいと考えている。近いうちに、大学の先輩・後輩の皆さんとコンピュータ上でお会いできると思う。お互いに有意義な情報交換ができるように情報化の流れに乗り遅れないようにしましょう。

社会資本ストックの増大

公的社会資本ストック額は年々増加し、2010年には1,100兆円に達すると見込まれている。社会資本ストックの増加により、維持管理費が増大し、これへの対応が重要な課題となっている。また、今後の高齢化の進展を老年人口比率（65歳以上の高齢者が総人口に占める割合）で見ると、現在の約12%が、2000年には約17%、2010年には約21%まで高まると推定されている。これに伴って社会活力や建設投資の鈍化が懸念され、新築工事だけでなく維持管理、リフォームなども重要な市場になっていくと推察される。

ある期間使用した建物の経済的なリノベーション技術は重要であり、さらに新築にあたって、将来の維持管理を考慮しつつ、メンテナンスフリー化やライフサイクルコストを考慮した維持保全性に十分配慮する必要があると考えている。今までもさまざまな分野のさまざまな人が実施してきている。耐久的（高寿命）な建設物を目指すと共に維持管理がしやすく、経済性と信頼性を兼ね備えた劣化診断技術、補修・補強・改

修技術の開発などについて考えてみたいと思っている。

国際化に想う

終戦後の高度経済成長期につくられた各種の制度の見直しや新制度の導入が盛んである。われわれの身近なところでもいろいろな変化が生じている。たとえば、(1) 入札制度の見直し、(2) ISO9000シリーズの資格取得、(3) JISの見直しおよびISOとの整合、(4) 外国建設資材を活用するための性能評価大成の発足などである。

これらの見直しや新制度導入の理由としては、日本社会や建設業界の閉鎖性や硬直などが挙げられているが、よく考えてみると、国内で通用していた諸制度が国外でも通用するように修正していく過程の対応であり、グローバルな視点での変革と思われる。このような変革がうまく進むようにバックアップするのも重要な仕事であり、またこれをビジネスチャンスにするのは経営的視点として重要であろう。

結び

卒業20年で、記念すべき20年に執筆できたことを大変うれしく思います。また機会がありましたら近況報告をしたいと思えます。

▶同窓生からの便り

私のプロ・マネ法

櫻田 滋 ●大成建設エンジニアリング本部/1965年卒業



1965年（昭和40年）建築学科設備工学コース卒業の櫻田です。中島研究室の1期生ということで中島研・大橋研卒業生の集まりである「つのはづ会」（会員約700名）の会長をしております。

ゼネコンに入社して3年間は空調・衛生の設計をしていましたが、設備部の中にプラント関係を担当する課が出来、各種



1993年に竣工した「松山油槽所」。

パイプラインの設計を担当する事になりました。その頃から建築設備と疎遠になりだし、1971年には設備部から独立してエンジニアリング部となり、私も石油関係の仕事をする事になりました。具体的には、タンカーからの荷揚げ施設、それらの配管、消火、電気、計装の設計・施工管理等を行う仕事です。

この石油関係の仕事をはじめて20年以上になります。最初の頃はプロジェクト全体の中で指示された範囲だけを責任をもって対応すればよかったのですが、ある程度経験を積みますと、指示される立場になり、またプロジェクト全体をまとめることが要求されるようになってきました。いわゆるプロジェクト・マネージャー＝プロ・マネです。このプロ・マネをするようになって私自身大変勉強になり、重要な任務であることを痛感しています。

以降、私のプロ・マネ法の一部を記述させていただきます。ひとつのプロジェクトには多数の人たちが関係してきます。まず顧客関係（窓口はひとりでも、担当別に10人ぐらいくぐります）、次に官庁関係（消防法、高圧ガス取締法、労働安全衛生法）、社内（上司、部下、営業、土木、建築、支店）、そして協力業者（工事業者、商社、メーカー、検査会社）等です。それらの責任者だけでも30名以上になります。そしてこの30名以上の関係者は、考え方、分野、経験年数、立場などが、皆違うのです。

プロ・マネの第一の仕事はこれらのさまざまな意見をもった人たちを同じ目標に向け推進させることなのです。そしてプロ・マネの第二の仕事はこの多くの人たちに「よし、やろう!」という気持ちをもたせることです。この「よし、やろう!」と「しょうがない、やるか」の差は大変大きいのです。

関係者すべてが営利企業（いや、官庁関係者は違います）なのですから、赤字になるか、儲かるかの差です。

この「よし、やろう!」という気にさせるために、私は特に3つのことを心掛けています。

第一は「時間を守り、守らせる」ことです。私はプロジェクトがスタートすると、客先に対しても、官庁の人にも「関係者の中で約束の時間を守らない人は、このプロジェクトを成功させる気のない人だから、はじめから降りてもらおうと思っていますよ」「やる気のある人たちだけで進めたいですね」と機会あるごとに話しをします。

第二は「会って話をする」ようにします。新しいプロジェクトをはじめる時「キック・オフ」といって顔合わせを兼ねて打合せ会を開きます。多くの場合「次回は2週間後、それまでは電話かFAXで確認し合ひましょう」となります。しかし私は常々電話やFAXはあまり好きではなく最小限の利用にしています。「会って話をする」のは「信頼関係を育てる」のが目的です。そのためには相手の眼を見て、「本当の意志を伝え合う」ことが必要なのです。私が「会う」ために動き回るのをみて「ムダに時間を費やして」とか「メディア時代なのに」などという人がいますが、プロジェクトの初期段階では特に多くの人と何回でも会うことにしています。

3番目はトラブル対応についてです。プロジェクトには変更・トラブルはつきものなのです。特に同じようなトラブルが続くとイヤ気がさしたり、責任のなすり合いになったり、チーム全体がシラケムードになり、大きなプレーキになります。プロ・マネは当然トラブルが起きない様配慮することが第一ですが、発生してしまったトラブルに対しては、原因追究よりもそのトラブルにより、今後どのような影響が出てくるか

を想定し、問題が大きくならないうちに先手を打つことが大切です。特に自分ひとりで解決するのではなく、関係する多くの人に相談し、方針を速やかに決断することが肝心です。私の経験では「雨降って、地固まる」でトラブル時に果敢に対応することにより、信頼関係が強固になる場合が多いものです。

多くのプロ・マネをしてきて全体相互の信頼関係が確立し、「このプロジェクトは、うまくいく」と感じるのは4~6か月ぐらい経った頃です。相互信頼ができ、全員で「よし、やろう!」というムードが出てくれば、その後は、相当大きなトラブルがあっても、あわてることなく対処できます。

そして最後にプロジェクトが完成し、引渡し時や竣工式の際に、お礼をいわれたり、施主の満足感が感じられると、私自身が一廻り大きくなったような気分になり、次のプロジェクトに向けファイトが湧くものです。

同窓生からの便り

想いを形に

遠藤敏也 ●スタジオ宙/1984年卒業



私の事務所では、現在、都内にRCと木造の混構造の小住宅1軒と、鉄骨造の特定郵便局の現場が進行している。またほぼ同時期に住宅数件の設計業務が舞い込んできたため、「超」零細設計事務所であるわがスタジオ宙(みゆう)では、その対応に四苦八苦している。

そんな折、この同窓会誌の編集者である友人からの原稿依頼があった。雑誌の編集を生業とし、日頃大先生方を相手にしている彼にとって、駆け出しの私を手玉にとることなど造作もないことである。若手代表とかなんとか適当におだてられ、つつい木に登ってしまった次第である。とはいっても、コンピュータの前に座り、キーボードをぼち、ぼち、と叩いてみても、原稿はなかなか想うように進まない。5年前に改

正された、株式会社の最低資本の引き上げに伴う増資の手続きやら資金繰りのことも、人指し指の動きを鈍くしている一因である。とりあえず、わが事務所のはじまったばかりの歴史を振り返ってみたい。

……そう、もう5年も経ってしまったのだ。この吉祥寺に、街を見渡せるベントハウスを借り、パートナーの郡裕美と共に事務所をはじめたのが商法改正の直前だったから……。よくぞ今まで生きてこられたものだと、自分自身感心する。たかが5年と笑われるかもしれないが、大きなコネクションがあるわけでもなく、先の見通しもまったくないままにスタートした私たちにとって、これは、まさに驚異的なことだ。このようにやってこられたのは、クライアントや工務店の方々をはじめ、私たちをとりまく人たちに恵まれたとしかいいようがない。最近はおかげさまで、雑誌やテレビに作品が少しずつ取り上げられ、それを見て設計の依頼がくることもある。しかし、事務所設立当初は、作品といえるようなものもないわけではなかった。にもかかわらず、わずかに繋がっている人間関係だけで、個人にとって大きなイベントであるはずの、家を建てるという事業を任せてくれたク

下2点:「陽の『間』」と名づけられた住宅。パッシブソーラーを取り込んでいる。





「面」の壁」と名づけられた住宅。
(撮影：浅田美浩)

クライアントの方々に、あらためて感謝したい。そこには、30歳過ぎるか過ぎないかというわれわれが、どんな仕事をするのか見守ってみたいという、親情的な気持ちが存在していたのではないと思う。

建物を建てるということは、形態のプロポジションとか、空間のヴォリュームというような、建築学的な言語だけでは説明しきれないことがたくさんあることがわかってきた。たとえば、クライアントの要求が過剰だったり、設計に力が入りすぎたりして、こちらの思惑を超えて予算がオーバーする時がある。空間の質を下げないでコストダウンすることは大変な作業なのだが、私たちは、余分な贅肉を削ぎ落とし、施工者の立場にたってもう一度設計を見直すと同時に、より安価でよりイメージに合う材料を手に入れるために自ら東奔西走する。自分のつくりたいものを実現するためには、複雑な建築資材の流通経路にまで入り込まねばならない。幸いにも、その結果、直接相談にのっていただける意欲的な業者やメーカーの方々と出会うことができた。こういった関係なくして、設計したものを建築として実現することは難しい。ちょっと余談ではあるが、そうやって出会った方々のうちのひとりを紹介させていただく。山口県萩市に在住し、材木商を営む小池理義さんである。氏は、日本中どこでも良い木があれば飛んで行くというほど、木をこよなく愛し、単なる銘木集めという意味とはまったく違い、木材という建築材料を本当に理解している人物のひとりだ。機械乾燥が主流になった今でも、木の艶が抜けてしまうとって、頑固に天然乾燥にこだわり続けている。

いっぽう、そのような材料を扱って工事をしていただいている工務店や職人さんたちとも、なかなか楽しいつきあいをしている。建築工事に携わる方々は、設計者のことを「先生」と呼ぶ習慣がある。ところが彼らは私たちのことを決して「先生」と呼ばないし、こちららもいさせない。設計者と施工者という立場をお互いに尊重しつつ、クライアントを含め、

ひとつの建物をつくるという同じ目的を持った「仲間」として認識しているからだ。そんな関係だから、新しい材料や厄介な詳細図を持って行っても「何ですか、それは……」と興味津々で、一緒になってアイデアを出してくれる。みんな、建物をつくるのが好きだということもあるが、私たちの設計に対する姿勢を十分理解してくれているからだと思う。私たち建築家は、その建築に関わっているすべての人たちの「想い」を、最良の形として表現する義務がある。依頼してくれたクライアントや、理解を示してくれる施工業者の方々の「想い」に対し、こちらも相当の「想い」を込めて対応しなければならない。中途半端な態度はどうしてもとれない。私たちは、実際の施工の段階でも、自分たちでほうほうを回って材料を揃え、手づくりのサンプルをつくったりもする。素材の微妙な色合いやテクスチャーを職人さんに伝えるためには、図面だけでは不十分だからだ。

こんな調子で仕事をしているものだから、プライベートと仕事の境界がほとんどない。食事も、事務所ですることが多い。あげくに広いルーフトラスを利用してハーブや野菜の栽培もはじめた。元来が料理好きということもあり、スタジオ宙のテラスパーティーは、来賓の方々にかなりの好評を得ているようだ。まったくもって、オフィシャルなイメージとはほど遠いが、今のところ結果的にそれがよい方向に作用しているのではないかと考えている。クライアントの方々とも、設計者仲間とも、他の友人たちとも、仕事とか年齢とかを超えて「友達」的つきあいが継続している。アトリエ事務所という小さな世界に、決して安住しないよう、自由な気持ちを持ち続けていたいと常々思っており、それを打開する方法を私たちに模索している。そして、私の「想い」を実現するため、建築をできるだけ手の届くところにおいておきたいのだ。

やはり、このような機会を与えてくれた友人に感謝しなければならぬ。木に登ったことにより、また広い世界が眺められる。そして、新しい関係が生まれることに想いを巡らし、人指し指を休ませることにする。

この「同窓生からの便り」では、皆様からのお手紙をお待ちしております。身の回りのこと、最近の建築業界のこと、大学のこと、事務所や会社の宣伝など、内容は問いません。2,000~2,400字程度でお願いします。カット(写真、スケッチなど)数点と顔写真、卒業年度および簡単な略歴を添付してください。

原稿送付先→工学院大学建築学科同窓会

「同窓生からの便り」係

〒160 東京都新宿区西新宿1-24-2

チームをつくってコンペに挑む

●●——今日はお忙しいところありがとうございます。与儀さんは1968年に工学院大学建築学科を出られて、故郷の沖縄で設計活動が続けいらっしゃいます。このところの沖縄県立武道館実施コンペで最優秀賞、そして「大学院社会人特別選抜」でこの4月から工学院大学の博士課程で勉強されるという、文武両道を歩んでいらっしゃる方です（笑い）。沖縄県立武道館のコンペはどのような経緯で参加されたのですか。

与儀——沖縄は1972年に本土復帰しています。それで1992年に復帰を記念する事業としてコンペをすることになりました。これまで沖縄の大規模建築というのは、黒川紀章さんであり大谷幸夫さん、山下設計、日建設などといった大手事務所への特命ということで行われてきました。ところが知事が変わり、復帰20周年記念するものとしてコンペをなさいたいということになったんです。

そのコンペではわれわれが最優秀をいただいたんですが、その案は3つの事務所のJVでやりました。望月洵研究室出身で構造をやっておられる松田さんの事務所、私の事務所のOBで金沢工業大学出身の本庄さんの事務所、それと私の事務所です。

この県立武道館のような大規模建築のコンペをするにあたって、行政側はその参加資格に条件を設けていました。それは一級建築士を6名以上という条件だったんです。というのは、沖縄の設計事務所の中で一級建築士が6名以上いる事務所は20数社しかないのです。

●●——そうなると、それは前提として大手を指名するよということになってしまうのですね。

与儀——しかし要項では、コンペをするにあたって連合でもいいですよというのがありました。そこでわれわれは連合で応募したのです。

沖縄でも従来、大規模建築の発注は一級建築士を6名以上抱える20数社の中からの指名で行われていたのです。今回の県の狙いは県知事の要求もあって、そうした中で一級建築士6名以上という枠をつくりながら、それ以外からも案を募りたいということにあったようです。そこでわれわれは3社の連合で参加したんです。

応募総数は44点でしたが、沖縄には単独で参加資格がある設計事務所が20数社しかないのですしコンペに参加しないところもありますから、30数社近くはアトリエ事務所どうしがJVで参加したわけです。

われわれの3社の連合というのは、今回のコンペのために連合をしたわけではないんですよ。コンペに参加する5~6年前から組んで仕事をしてきました。ほかの事務所は参加するのが目的で組んだのですが。

◆同窓生を訪ねて◆

沖縄からの発信

環設計 / 1971年卒業
与儀清春



与儀清春（よぎ・きよはる）

1944年 沖縄県生まれ
1968年 工学院大学建築学科卒業
萩原研究室研究生
1970年 二幸設計室
1972年 究建築研究所
1974年 環建築事務所設立
1977年 環設計に改組

沖縄県建築士事務所協会理事（1977年度より2期4年）
沖縄県建築士会理事（1981年度より3期6年）
沖縄県建築士審査会試験委員（1984年1期2年）
琉球大学非常勤講師（1985年度）
沖縄YMCA建築専門学校講師（1987年度より2年）
沖縄県建築士会幹事（1993年度より現在）
那覇新都区土地画整理審議会委員（1993年度より現在）

コンペ参加決定から締切までわずか75日間で、しかも面積は12,000m²（笑い）。本来、この規模の仕事は経験がないとできませんよ。われわれのチームは以前からネットワークをつくってやってきましたので、有利だったのかもしれませんが。慌てて組んだJVの作品とわれわれの作品の間には歴然とした質の差があったようにも感じているんですよ（笑い）。

この武道館のコンペが終了した1年半後の、婦人センターのコンペが実施されたのですが、この時は行政がさらにルールを厳しくしていました。今度はJVの事務所の数を規制したのです。その結果、2社としか組めなかったのです。しかし松田さんはこの60億の仕事を取ることができました。これで工学院大学の知名度が多少とも上げられたのではないかと思います。

●●——松田さんという方は与儀さんと同級生ですか。

与儀——いいえ。私より後輩ですから、上下関係がついています。同年代だと難しいかもしれないのですが、うまくいったのだと思います。

彼の事務所は、構造だけでなくデザインも手がけていますが、松田さん自身は構造をやられています。

●●——では、与儀さんと松田さんと与儀さんの事務所OBの本庄さんと組まれた時には、与儀さんが引っぱっていくのですか。

与儀——そうですね。年齢も上ですし、最初にチームを組もうといい出したのが私だということもありまして（笑い）。私は荻原研究室ということで、設計というより計画なんです。デザインが下手です（爆笑）。ですがチームの組織づくりなどは経験があるものですから。だいたい、ものをつくる時には人より先に口が出るんですよ。私は命令するだけで、その後一生懸命彼らがつくるんですよ（笑い）。

地元の琉球大学にも建築学科はあるのですが計画の研究室がないんですよ。ですから、沖縄では建築計画について多少自慢させていただいているところがあるんです。そういう環境ですから、沖縄で活動しているうえでは計画や基本については自分が自信をもって引っ張っていかうという気持ちがありますよ。だから計画段階では、松田さん、本庄さんに対して譲れないところはありましたね。そして計画がまとまれば自分は後方に引く。引いた後は松田と本庄がうまくやるという形になったのです。沖縄ではそのチームは評価されていると思います。

県の人もそういう形でやっているのがわかっているんですよ。これまでの実績もあって、私の方が年齢が上の分、リーダー的な評価をいただいていた。私にとっては過大な評価だと考えていますが。仕掛けと実際的な責任は取るけれども、細かいことはみんなでやったんですから。

上：沖縄県立武道館のコンペを勝ち取ったチーム代表者。左より本庄、与儀、松田の3氏。本庄氏は与儀氏の事務所OB。松田氏は工学院大学望月月研究の出身。

下：左より与儀、大城、松田の3氏。大城氏は沖縄県立武道館の第一期工事の現場代理人で、工学院大学横田研究室の出身。

右頁上：沖縄県立武道館全景パース。

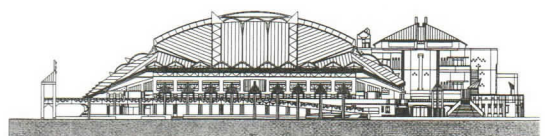
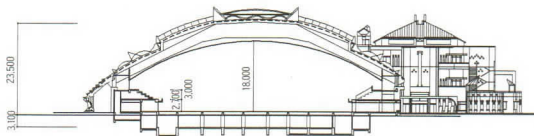
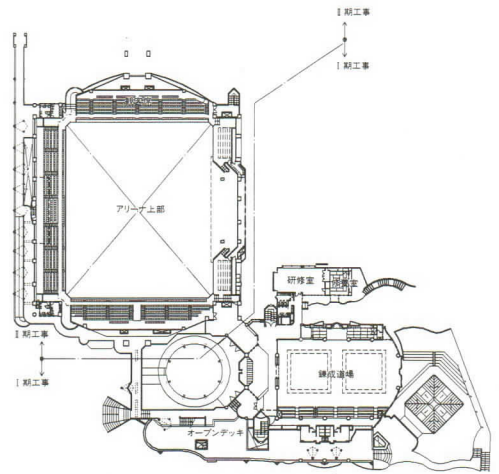
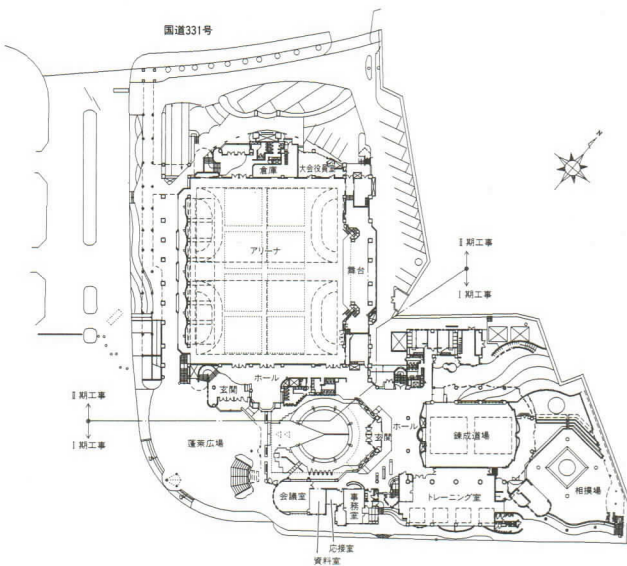
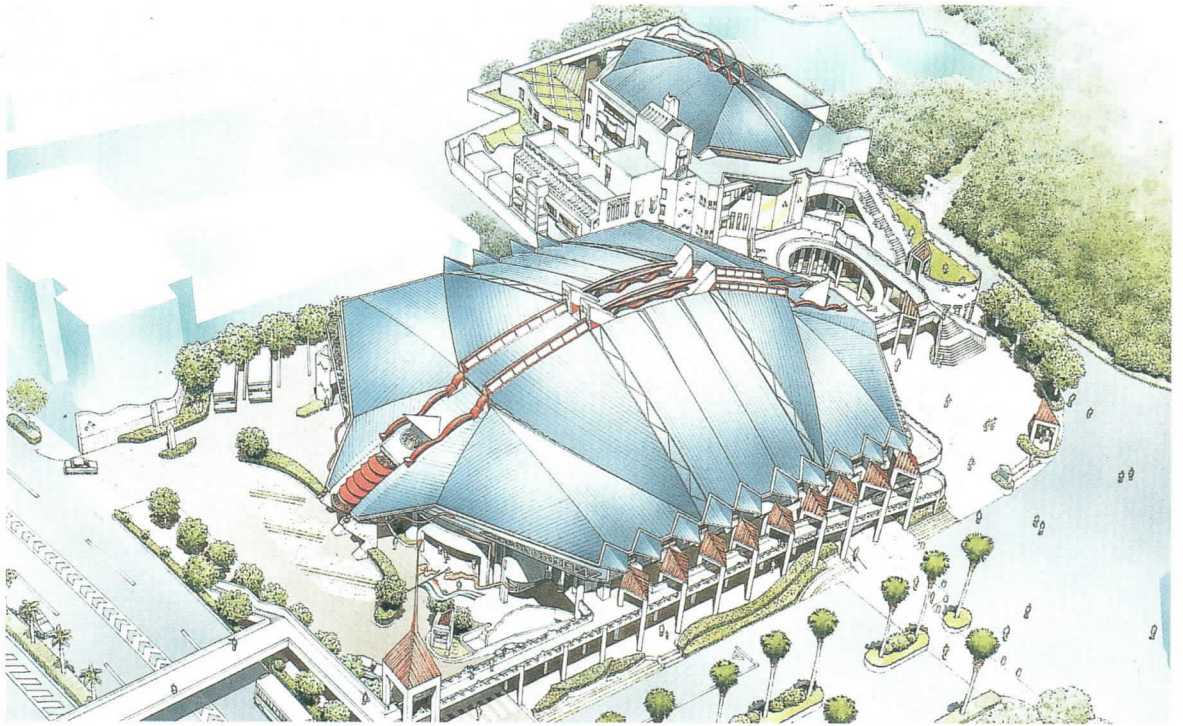
右頁中左：沖縄県立武道館1階平面図。縮尺1/2,000。

右頁中右：沖縄県立武道館2階平面図。縮尺1/2,000。

右頁下左：沖縄県立武道館断面図。縮尺1/2,000。

右頁下右：沖縄県立武道館南立面図。縮尺1/2,000。





沖縄には「建築家」がたくさんいます。彼らはまず自分のためにスタッフを使います。建物をつくるというのは、自分の作品を出すということです。ですからチームを組まない。われわれのやり方は、個人の名が出なくても質を保つためにはチームを組むという方法です。そういった意味でも評価をいただいていると思います。しかし、それでもわれわれは大手事務所ではないのでなかなか指名がかかってこないのですね。ですから絶えずコンペをやっています。

●●——コンペの面白さというのはなんですか。力がつくとか、チームワークが結束していくのが身をもって感じられるとか。

与儀——実は沖縄というのは小さい島で、物理的な話からしますと、目一杯働くと仕事はないんです。ひとりが目一杯働いたら誰かの仕事なくなるという世界です。ですから必然的に気持ちの上で無理をません。平均化しているわけです。ところが、やはり持てる力をどこかに出したくなってくるわけですよ。いろいろな物を見て、勉強して、それで建築をつくりたくないわけがないじゃないですか（笑い）。

沖縄の人は、年に1~2回、多い時には4回は建築を見に沖縄を出ますよね。ずっとそれをやっているんですよ。たえず何か求めて旅行し、遊び、本読んで、ボランティア活動して。いろいろやっているんですよ。それを振り返って自分の建築の仕事に発揮したいと。コンペはその発揮しどころなんですよ。本当は日常生活でもっと力を発揮したいんですよ。でもしょうがないんですよ。だからコンペには何度も挑戦するんです。15~6回挑戦していますよ。5回目で通っているんです。

●●——工学院の出身者って、コンペが好きですよ。通るか通らないかは別ですが。

与儀——コンペは真面目な人でないとできませんよ。やらない人の理由はいくつかあって、忙しいからやらないとか、人がいないとか。何か不真面目ですよ。

アトリエ派と大手事務所、ゼネコン

与儀——武道館の現場の工事責任者というのが実は工学院のOBなんです。国場組という工務店です。東京でいえば最大手のゼネコンです。武道館の1期工事をしたのはここです。国場組から人選されてきたのが工学院OBだったんですよ。

●●——現実には、沖縄の中では工学院出身者は人数的には多いのですか。

与儀——多くはないですね。工学院は単科大学ですからね。総合大学ではありませんから、数的には少ないでしょう。役所の中では前の校友会の支部長が浦添市の建設部長から総務部長になられています。この方は2部を出ながら宮内庁の

管轄局にいた方で、民間から浦添市に引張られたんです。沖縄在住のOBのなかではリーダー的な方でしょう。那覇市でも、われわれが仕事をもらう教育委員会の施設課があるのですが、そこの建築課長から文化課長になった方がいます。

●●——沖縄には個人事務所、いわゆるアトリエ派は多いんですか。

与儀——沖縄の場合は個人で仕事がしやすいんですよ。たとえば、当初は親戚、縁者から仕事がきますが、それで認めてもらって、狭い部分で名前を売っていくんですよ。ですから独立するのはみんな早いんです。独立するのが早くて、みんなそれなりの作品をつくるのだけれども、個人の住宅が専門になる可能性が多いですね。私はどちらかという大規模な建築を多くやりたかった。そのためには、チームつくりたい、もっと広範囲でつくりたいと考えたんです。

●●——沖縄のアトリエ派の中でも、昔は金城信吉さんとか今でいえば洲鎌朝夫さんとか、中央でもよく知られている方たちはネットワークを組んでいるのではないですか。

与儀——そういった方たちもやはりその人自身でされますね。チームではなく、あくまでも個人です。

私がチームにこだわるのは、自分の体力、気力が落ちてきた時を考えてなんです。個人にこだわると、自分の気力が落ちてきたときにはそれまでですが、チームならそれを補うことができる。いくら個人がやっても本人がやれる世界というのはしていますよ。われわれは何千㎡、何万㎡きても怖くないんです。

おかげさまで、われわれは一応の評価をもらっているのですが。行政はわれわれがいるから、仕事をアトリエ派に少しは出してもいいと思っているんですよ（笑い）。

●●——ある意味では、本当に個人でやっている人たちの繋ぎ役になっているのかもしれないですね。公共と、役所と、個人でやっている人たちの間に与儀さんたちのグループがあって、役所にしてみればそこに仕事を渡せば楽なのはわかっている、アトリエ派に渡せばこういう結果になるのは見えているけれども、アトリエ派に流さなければいけない事情もあると。

与儀——コンペなりプロポーザルなりで行われるということは、県としてもアトリエ派の建築が欲しいのですよ。われわれもアトリエ派ですが、その中でやり方によってはより質の高いものがつくれるという体制をつくってきたのです。個人個人の能力を発揮しながら、大きな建築でもつくれますよとね。行政もそれを後押ししてくれる。

今度、平和資料館のコンペティションがありまして、これをまたJVを組んでやっています。その次のコンペは、300億近い県立の図書館、博物館、美術館のコンプレックス。これは

もっとハードルが高い。一級建築士が10名以上。そして経験者。経験者といえば沖縄には事例が少なくないですね。でも、その参加資格は行政側からわれわれアトリエ派に対する問いかけですよ。お前ら無理だろうという。でもクリアしなくてはいけないです。幸いわれわれの場合はクリアできたんですが、それはこれまでもチームを組んできていたからできたんだと思います。われわれがやるやらないは別にして県はクリア基準を上げていっているんですよ。県の考え方は僕らには甘くないですよ。やりたかったらそれなりの組織をつくってやってこいといっているわけですから。

私は、事務所のメンバーを5名にとどめているんです。どんどん独立を勧めている。私の事務所を出たメンバーも同じように自分のスタッフに独立を勧めてやっています。自分自身も建築をつくりながら、これ以上でやったら食っていけないですよ。他のところでは、所長自らの建築を創造する姿勢を削ってでも20名も使っていますよね。そうすると指名にも入れますよね。それに対抗するために、5名の事務所どうしがチームを組む。そうすれば指名にも食い込める。これは行政側から求められていることでもあります。行政側からはハードルを下げないよと問われていますから。

●●——そのハードルに対応していくためにも、考えていられるんですね。

与儀——沖縄には国建という規模が全国レベルの事務所があります。われわれがチームをつくるときに、口でいってもそのニュアンスが伝わらないんですよ。ですから国建と対抗できるようなチームをつくらうという言葉が出たんです。国建1社だけがつくり続けるのではなく、僕らもつくりたいなと（笑い）。

●●——チームの一番の利点はなんですか。

与儀——いちおう私がリーダーといいますが、頭でやっていますが、担当者なりチーフを前面に押し出して進めますから、私自身の苦勞が軽減されると同時にみんなが責任を持ちつつ楽に仕事が進められます。それとひとりでやっているプランはたいしたことないといわれますし（笑い）。うちの事務所にあつては、たとえ私がやったとしても、それはいったい誰がやったかという気分ですよ。逆にそういう形でいたから、チームをつくりやすかったのかもしれない。他の事務所はみんな所長が前面に出てくる。たしかに大きな建築をつくっている人たちはたくさんいるんですよ。でも、そのために全部自分で背負っていくし、売り込みもするし、自分のために作品を出して、自分のために文章を書き、最終的には何でも自分のためにとやってしまう。そして、後は行き詰まってしまうんですね。私はそんなに耐えられる人間ではないので（笑い）。それに、みんなと一緒にいきたいから。一緒にいきたい



左は与儀氏。右は同窓会会長の高木氏。

いから、お前にこの部分を分担するぞとやるんです。

武道館の時は、実際の作業は本庄さんがメインというやり方をしているんですよ。私が代表者だというのはわかりますから、下手に全部を背負わなければという脅迫観念もありませんし（笑い）。楽ですよ。のんびり『NICHE』のインタビューも受けられますしね（笑い）。

●●——これまでは、ほとんどの中央の組織事務所なり有名作家事務所なりがやっていた仕事に対して、小さなアトリエ派がチームワークを組んで、地元の零細の事務所でも大きな物ができるんだという、その一步を踏み出した大きな功績ですよ。各地方にいるOBもすごく自信を持つでしょうね。

与儀——地方において、ひとりで作家性を出そうとすると、きついなという感じがするね。だからチーム組んだほうがいいんですよ。ひとりでやっているということですから、自分が忙しければもうそれでおしまい。チームワークを組んでいれば、自分が忙しくてもチームを使えばできるんですよ。

●●——沖縄出身の工学院の卒業生が戻った場合、OBとのネットワークはつかみやすいのですか。

与儀——沖縄では、比較的同窓生どうしのつながりは強いと思いますよ。

なにしろ狭い土地からお互いによく知っているんですよ。民間の建築会社の社長とかもいますし、役所にも多いですね。それはお互いで便宜を計ってチームワークをよくしているんですよ。

●●——協力しあったり励ましあったり。

与儀——それは20名ぐらいの大きい事務所はそれなりに営業活動をしているんですよ。ゴルフをするとか。私は営業をを一切していません。結果的には同窓生が役所がいた関係で指名にあがることもありました。そういう意味では助かっています。

●●——工学院の学園の同窓会、校友会としては200人ぐら

いいんですよね。

与儀——専門学校や高校を入れると140~50人はいるんじゃないでしょうかね。200名を越すかもしれません。実際に連絡をとるのは6~70名かな。そのうちでまた20名が建築なんですよ。

沖縄の建築業界の状況

●●——沖縄の場合はアメリカに占領されていた関係から、建築業界の組織が設計と施工とに完全に分離している状況がありますよね。その辺のところについてお伺いしたのですが。沖縄の場合には設計施工というのがないんですよね。

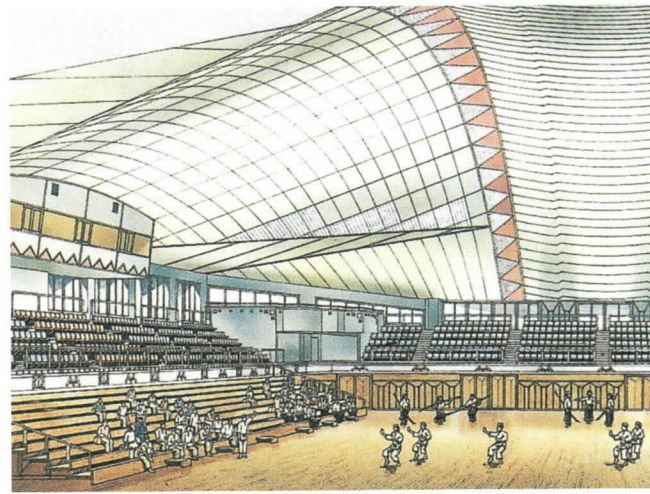
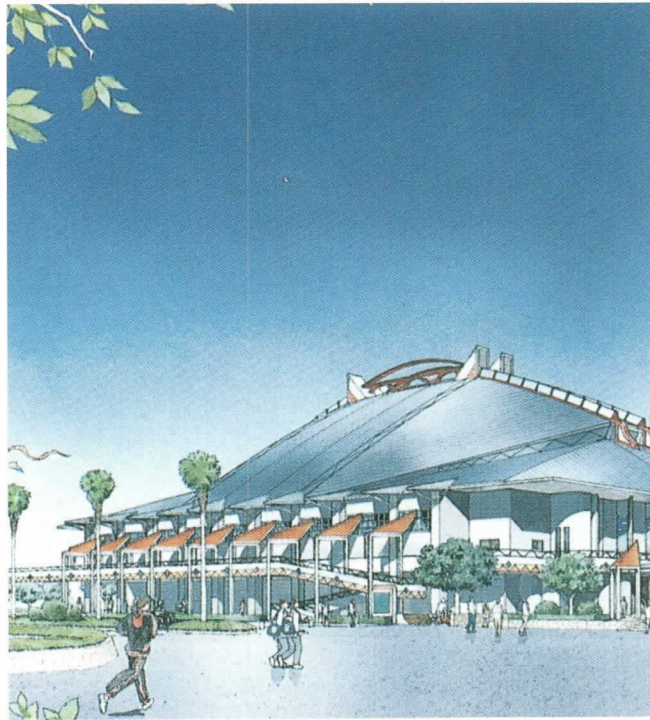
与儀——私たちからいわせれば、極端になりますが設計施工は潰したい(笑い)。もちろん入り込んできていますよ。

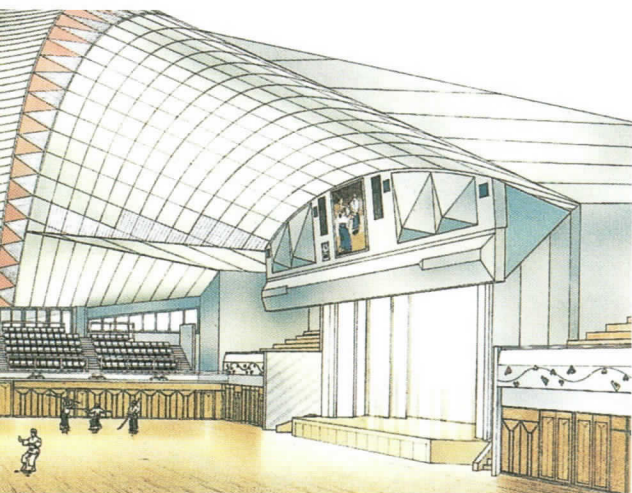
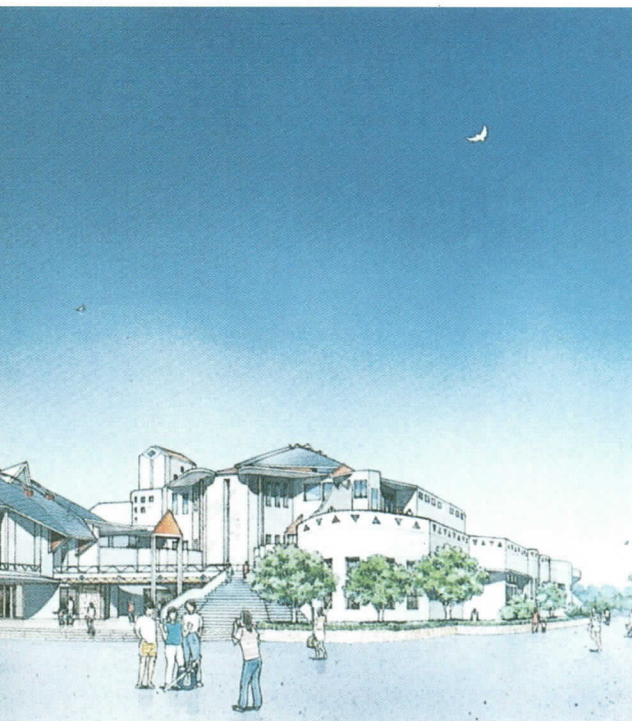
沖縄のほとんどの建築はRCですよ。建物をつくるために施工者は施工図を描きます。ところが沖縄では、施工者が施工図を描かない(笑い)。ごく当り前に大工さんがつくってしまう。逆に施工図が必要なくらい複雑な建物は、当然設計者側で図面を描くんですよ。建築の雑誌で沖縄の作品の特集とかがありますよね。あれは特別な技法ではないんです。誰でもできること(笑い)。あんないろんなRCでも。これはごく当り前に図面を描いてそれをこなしてきたものだから、誰でもできるということです。沖縄の事務所では設計事務所ですべて描いたんですよ。

●●——それは沖縄のどの人たちもですか。

与儀——そうです。すべてです。ところが、それもある時点まででした。復帰を境に大手の設計施工が沖縄に入ったんです。今は変わっていく段階です。それまでは、大工さんたちは現場で苦勞していたわけですよ。大工さんはわれわれの描いた図面通りつくっていかなくてはなりませんし。われわれも現場で建築家として鍛えられていたんです。しかし本土の設計施工が入ってきたために、楽を覚えてしまいました。それが日本で建築家がだめになっていく経過なんですよ。設計者の描く図面は確実に少なくなってきています。楽だから。これまでは現場に呼ばれて細かい部分の指示しないといけなかったわけですよ。今は指示待ちしないように施工図がある。しかしそれは設計施工がもたらした大きなマイナスですよ。建築家としての意識がなくなっていくのですから。今でもJIAなどは設計と施工の分離などといって頑張っているんですよ。建築の世界では、いわば本土を沖縄化しようということです。

ところで、沖縄の場合には設計者がみんな施工図同様の図面を描くから誰でも施工できるんですよ。ですから、どんな形でも単価は同じ(笑い)。





●●—なるほど。考えて見ればそうですね。

与儀—そこで問題となるのは、それを本土のゼネコンに頼むと割高になることです。しかも建築家がやりませんから、でき上がりがどんどんシンプルになっています。設計者は全部図面を描くことで鍛えられ、現場はそれをこなすことで鍛えられる。そしてどんなものでもこなせるということになるんですよ。まだどんなことでもできるんです。これを本土のゼネコンではやれませんよ。

●●—仮にやったとしても、ものすごく高いものになるでしょうね。

与儀—見積り技術を上げてほしくはありませんね。難しいものも簡単なものも同じ8,000円なら8,000円でいいです。

図面をたくさん描いて、自分たちに責任の意識を持つ。しかし、だんだん楽な方向にいています。まずいですね。われわれのチーム内では、図面の枚数は少なくないようにしようと声をかけています。

●●—それは本当に大切なことですね。デザインのイニシアティブを取っていく上でも。

与儀—そして沖縄ではできるだけゼネコンには仕事を指名しないというルールをつくる(笑い)。

●●—ゼネコンに勤めている同窓生もいますからお手柔らかにお願いします(笑い)。

与儀—ゼネコンだったら、県立武道館のような形の建築は出てこないですよ。外部空間が多い、壁面積が多い、施工性が悪い(笑い)。

●●—四角くつくった方がはるかに楽ですものね。

沖縄は戦争で徹底的にやられて、米国の領地化があって、材料とかも変化しましたよね。モジュールは変化したんですか。

与儀—それがですね、尺文化なんですよ。メートルは入ってないです。インチも入って来ていません。

●●—戦後はRCでしょう。RC建築がどういう風に伝統的

上：沖縄県立武道館全景パース。
中：武道館メインアリーナ内観パース。
左：沖縄県立武道館錬成道場棟。

な物を受け継いでいるんでしょうね。三六ペニヤは変わらないわけですから。

与儀——かなり違いますよね。どこかに共通点があるんでしょうが。その流れをしっかりと整理したものをつくりたいと思いますね。

「工学院」という名前

与儀——私が工学院大学を選んだ理由のひとつは、その名前なんです。その名前に惹かれて入ったんです。

●●——名前に惹かれて受験したということですか。

与儀——明治とか、法政とかみんな同じに見えたんですよ。当時、「工学院」という名前の印象は何となくユニークであり、カチッとした感じだと思ったんです。名前から真面目な印象を受けました。

●●——入ってからもそうでしたか（笑い）。

与儀——あんまり派手にしない学校でしたね（笑い）。

ところが、最近はずっと分かりよい名前にしてほしいと思っているんです。なぜかというと、外国には地名も入らない大学ってないんですよ。沖縄の人の生き方というのは、太平洋のひとつの島としての意識を問われているんです。地図を見れば日本列島からずっと離れている。そういう立場からひとつの学校の名前を見た時に、性格のない名前だと感じます。東京にいらっしやると感じないかもしれませんが、地方にいくと強く感じますよ、こんなに性格のない名前というのを。2年に1度ずつ校友会の台湾支部と沖縄支部が行き来しているんですが、やはり彼らから見ても名称に関しては非常におかしいなと思っているようです。東京大学とかは「東京」と固有名詞があるから定冠詞の「The」をつけられます。しかし工学院という名称はどうしても「The」がつけられないんですよ。前に言葉がないわけですから。入ったきっかけは名前だったんですが、注文をつけさせていただきたい（笑い）。

●●——仮に「東京工学院大学」だったら「The」がつけられるということですか。

与儀——世界的にそうですね。やっぱり固有名詞つけないといけないのではないのでしょうか。われわれが地域から沖縄から見た場合、自分の出身大学じゃなかったら、これはどこかの付属機関のような名称ですよ。さっきいったように入った時には本当に名前に惹かれて入ったんですよ。名前を選んだんですよ。名称には今では何にも魅力を感じない。東京なら工学院大学が分かりますけれども、地方では分からないですよ。時々中国の新聞に何とか工学院とか出るんですよ。となるとローカルな研究機関としか思えないんですよ。さっきの世界から情報を発信し受けるときに、もっと固有名詞をつけ

るべきだと思います。一般名詞じゃだめですよ。

●●——名前に工学院とつく専門学校は全国で200ぐらいあるそうですね。

与儀——台湾では、東京工学院大学校友会なんですよ。

●●——再開発をやって校舎が建て変わるに名称変更の話はあったんです。ところが法人名を変更するのは大変なことなんです。ですから学校法人名は工学院大学のまま、でも新宿に新しくできたものだから愛称をつけましょう、ということで新宿テクノキャンパスとしてSTEC。

与儀——私のいる沖縄というのは世界地図で見れば点にもならないんですよ。25年前初めてヨーロッパに行ったときに世界地図を見てがっかりしました。点もないんですよ（笑い）インターネットのようなもので工学院が情報を発信するとしますよね。そうすると、たとえば亜熱帯の日本の建築を見てもらおうと思ったら工学院にある私の資料を見てもらえばいいんですよ。ところが今のままでは吸引力はありませんよ。なにしろ名があって姓のない状態ですから。

●●——地方にいないと本当にわからないことですよ。この「同窓生を訪ねて」のページが、今までは振り返るだけのページだったのが、今回から未来に向かってというページになりますね。

与儀——この名称に関しては、ゆっくり卒業したら考えていることと思っているんですけども。

大学院社会人特別選抜

●●——そうか、もう一度入学ですものね。大学院社会人特別選抜ですね。この号では渡辺定夫先生が大学院社会人特別選抜について詳しく触れていますが、地方で頑張っている一級建築士を修士と認定し、新たに博士課程への入学を認めるという制度ですね*。

*日本建築士会連合会が全国に呼びかけ、一級建築士の資格を持つものの業績をチェックした上で修士と認定。業績チェックを建築士会連合会の審査委員会（大高正人氏、三井所清典氏、鈴木博之氏の学識経験者で構成）が審査し大学側に推薦をする。現在は工学院大学の博士課程だけが門戸を開いている。その後、大学側でふたたび審査が行われる。

与儀——まあ、偶然に私に当たったんですけどもね。連合会の推薦が。いや、まだ面接がありますから。

●●——この「NICHE」ができる時には入学されているでしょう。

どういうことを博士論文のテーマにしていられるのですか。

与儀——戦後というのは50年、私の年齢も50なんですが、そ

の50年の沖縄の現代住宅の変遷をつくっておきたいと考えています。沖縄に関しての民家論とか集落調査というのは数多くあるんですよ。ひとつのエリアにあるのでとらえやすいのと、文化的背景が見えやすいんですね。だから他の大学の先生で沖縄をテーマにして学位論文を取られた方がけっこう多いんですよ。でもみんな赤瓦に代表されるような民家論とか集落論なんで、沖縄を代表するような資料はそれだけなんです。ところがわれわれはそれよりも後の時代で仕事をしているんですよ。そして、その仕事をしたことに対する資料はひとつもありません。私は、赤瓦を含めて今の新しい建築に本来の沖縄建築のエキスが応用されているだろうと考えたんです。その何が守られて何が捨てられたかということを整理し、沖縄の現代住宅の変遷をつくりたいんです。文化論的な意味合いではなくて現代の考現学的なことをしたいんです。日常業務として設計をしていますから技術論文を加えて、意識しないでやっているであろうことも探し出したいんです。これを分析したり解析したりすることによって、一般的な沖縄の住宅がどうあるべきかといったキーワードが見つかると思います。

もうひとつは、住環境の問題です。国は高気密高断熱の住宅の推進をしています。ある時期沖縄もその枠組みに入れていた時があったんです。しかも本土のゼネコンや各種メーカーも研究し、沖縄に高気密高断熱の住宅が入ってきているんです。ところが沖縄というところでは高気密高断熱の住宅はそぐわないと考えています。あえていえば、沖縄の住宅は開放呼吸型だと思っているんです。そういうことに対してもっと沖縄自身が理論化しておかなければいけないと考えてます。そうしないと高気密高断熱の規格が国によってつくられ沖縄も画一化されてしまうと思うんです。そうすると沖縄の建物のこだわりがなくなってしまうでしょう。その比較もやっていきたいですね。高気密高断熱という考え方が沖縄に本当にあうかどうかの検討です。

●●——前者のテーマとはまた違って、かなり原論的な問題ですね。

与儀——ええ。沖縄というのは開放呼吸型だと思っていますので、そのいい事例を取り上げ紹介していきたいと思っています。そうすることで沖縄の現代住宅をもうひとつの視点で捉えたいと考えています。

それともうひとつは沖縄の現代住宅の設計手法についてまとめたいと考えています。沖縄の住宅の変遷は共同作業でできた「結」というのがまずありました。赤瓦が載ったり茅葺きだったり。そして大工のつくる住宅から米軍時代となります。そこで僕らは図面を描くことを覚えてきました。そしてゼネコンが入ってくることになるのです。ひとつ日の話とリンク



しますが、そこから住宅の変化による設計手法の話を展開したいですね。その先に、自分たちが信じる建築があるべきだとまとめたいと思っています。

ここ50年の沖縄現代住宅を通して3つの視点から沖縄を考えてみようと思います。

また一方で、これまでも考えてきたことなんですが、同じ視点で同じ緯度にある世界の島々やアジアの諸国の住宅を比較していきたいと思っています。

●●——沖縄というのは面白い緯度にあるんですよね。東京の緯度というのが中途半端なところにあって、ヨーロッパのかつての先進国の中心的な都市は札幌あたりと同じ緯度にあるんだそうです。沖縄あたりの緯度にはさまざまな都市があるんですが、東京の緯度には何もないんだそうです。ですから札幌の緯度にあった西欧文化というのは1950年代、60年代までで力が弱まったわけで、これが沖縄あたりにシフトしてくるのではと思っています。現実的にあのあたりの緯度には熱気のある国が多いですすね。

与儀——日本も沖縄も太平洋の島々のひとつなんです。大陸の近くの島というのは大陸の影響を受けるんです。シンガポールとか台湾とか。もともと、土着的な意味の文化を持っているんですね。これが政治的・歴史的な流れの中で残ったものとミックスされたものがたくさんあるんです。沖縄もそうですよね。そのあたりの共通項も探さなければいけない。だからそのためにも沖縄のことをよく知りたい、世界を見ていくための視点をつくりたいと思います。そのための大学院入学なんです。

●●——コンベと大学院への入学、まさに最初に話しました「文武両道」ですね。これからも工学院大学の同窓生代表としての活躍を期待しております。

本日は長時間にわたってお話をいただきまして、どうもありがとうございました。

第29期(1994年)事業報告

1. 同窓会誌『NICHE』18号発刊
2. 各研究室OB会活動の援助
3. 名簿の編集、発刊、新会員への贈呈
4. 総会の開催
5. 懇親会の開催

6. 校友会全国大会への参加及び見学会の開催
7. 準会員への援助(論文・コンペ作品への援助)
- ※その他
 - (1) 校友会神戸支部への阪神大震災義援金
 - (2) 阪神大震災現地調査のための援助金

第29期(1994年)一般会計報告

予算		決算	
収入	支出	収入	支出
a) 前年度繰越金 ¥4,039,308	1) 会誌発刊費 ¥1,400,000 (1) NICHEvol.18印刷費 ¥1,000,000 (2) 編集費 ¥300,000 (3) 雑費 ¥100,000	a) 前年度繰越金 ¥4,039,308	1) 会誌発刊費 ¥1,431,283 (1) NICHEvol.18印刷費 ¥1,030,000 (2) 編集費 ¥300,000 (3) 雑費 ¥100,000
b) 会費 ¥4,610,000	2) 各部会費 ¥60,000 (1) OB通信費 ¥60,000	b) 会費 ¥4,313,000	2) 各部会費 ¥32,300 (1) OB通信費 ¥32,300
c) 総会発送援助費 ¥914,331	3) 同窓会名簿発刊費 ¥1,966,000 (1) 印刷費 ¥1,700,000 (2) 整理費 ¥180,000 (3) 郵送費 ¥36,000 (4) 雑費 ¥50,000	c) 総会発送援助費 ¥934,000	3) 同窓会名簿発刊費 ¥2,015,567 (1) 印刷費 ¥1,787,874 (2) 整理費 ¥180,000 (3) 郵送費 ¥23,400 (4) 雑費 ¥24,293
d) 雑収入 ¥1,600,000 (1) 同窓会名簿売上 ¥400,000 (2) ニッチ編集発送費 ¥600,000 (3) 賛助金 ¥600,000	4) 総会費 ¥3,099,900 (1) 総会通知印刷費 ¥650,000 (2) 総会通知発送費 ¥2,349,900 (3) 雑費 ¥100,000	d) 雑収入 ¥2,188,000 (1) 同窓会名簿売上 ¥395,000 (2) ニッチ編集発送費 ¥556,000 (3) 賛助金 ¥769,000 (4) 総会懇親会費 ¥468,000	4) 総会費 ¥2,840,973 (1) 総会通知印刷費 ¥290,563 (2) 総会通知発送費 ¥2,450,790 (3) 雑費 ¥99,620
e) 銀行利息 ¥400,000	5) 懇親会費 ¥2,161,700 (1) 案内印刷費 ¥89,000 (2) 案内発送費 ¥1,272,700 (3) 懇親会費 ¥600,000 (4) 雑費 ¥200,000 6) 通信費(校友会全国大会 および同窓会主催見学会の 連絡・通信費) ¥989,000 (1) 案内印刷費 ¥89,000 (2) 案内発送費 ¥890,000 (3) 雑費 ¥10,000 7) 準会員への援助金 ¥800,000 8) 特別校宴会援助金 ¥800,000 9) 本部費 ¥100,000 10) 予備費 ¥2,173,902	e) 銀行利息 ¥5,775	5) 懇親会費 ¥2,199,098 (1) 案内印刷費 ¥152,955 (2) 案内発送費 ¥849,184 (3) 懇親会費 ¥907,078 (4) 雑費 ¥289,881 6) 通信費(校友会全国大会 および同窓会主催見学会の 連絡・通信費) ¥264,667 (1) 案内印刷費 ¥15,000 (2) 案内発送費 ¥50,680 (3) 雑費 ¥198,987 7) 準会員への援助金 ¥600,000 8) 特別校宴会援助金 ¥0 9) 本部費 ¥113,537 10) 予備費 ¥1,982,658
合計 ¥11,563,639	合計 ¥11,563,639	合計 ¥11,480,083	合計 ¥11,480,083

¥1,982,658 - ¥4,039,308 = ¥2,056,650

第29期(1994年)特別会計報告

収入	支出
a) 三井貸付信託元金解約金 ¥9,500,000	1) 阪神大震災義援金 ¥1,000,000
b) 三井貸付信託積立口解約金 ¥2,004,024	2) 阪神大震災現地調査援助金 ¥3,000,000
c) 三井貸付信託利息 ¥188,613	3) 三井信託定期口座(1) ¥6,500,000
	4) 三井信託定期口座(2) ¥1,190,000
	5) 利息を第一勧銀へ入金 ¥2,637
合計 ¥11,692,637	合計 ¥11,692,637

※支出のうち4,000,000円を阪神大震災の1)義援金2)援助費として、7,690,000円を運用財産として計上いたします。

第29期(1994年)運用財産目録

第29期当初		第29期期末	
1) 三井貸付信託元金	¥9,500,000	1) 三井貸付信託元金	¥0
2) 三井貸付信託積立口	¥2,004,024	2) 三井貸付信託積立口	¥0
3) 三井信託定期口座①	¥0	3) 三井信託定期口座①	¥6,500,000
4) 三井信託定期口座②	¥0	4) 三井信託定期口座②	¥1,190,000
5) 第一勧銀普通口座	¥1,698,650	5) 第一勧銀普通口座	¥244,306
6) 郵便振替口座	¥342,660	6) 郵便振替口座	¥30,200
7) 現金	¥579,867	7) 現金	¥104,045
合計	¥14,125,201	合計	¥8,068,551

¥8,068,551 - ¥14,125,201 = ¥ - 6,056,650 (減)

第29期(1994年)財産運用報告

	収入	支出	備考
三井信託	¥0	¥9,500,000	
三井信託(積立口)	¥0	¥2,004,024	
三井信託定期口座(1)	¥6,500,000	¥0	
三井信託定期口座(2)	¥1,190,000	¥0	
第一勧銀普通口座	¥0	¥1,454,344	¥244,306 - ¥1,698,650 = ¥ - 1,454,344
郵便振替口座	¥0	¥312,460	¥30,200 - ¥342,660 = ¥ - 312,460
現金	¥0	¥475,822	¥104,045 - ¥579,867 = ¥ - 475,822
合計	¥7,690,000	¥13,746,650	¥7,690,000 - ¥13,746,650 = ¥ - 6,056,650 ¥6,059,497 (減)

会計監査報告 平成7年4月6日

帳簿、領収書監査の結果、記載が正確であることを認めます。

建築学科同窓会監査委員 高信 碩文[㊟]

倉持 道夫[㊟]

工学院大学建築学科創設35周年記念事業運営財産目録

第29期当初		第29期期末	
1) 第一勧銀定期口座	¥11,605,526	1) 第一勧銀定期口座	¥10,000,000
2) 第一勧銀普通口座	¥0	2) 第一勧銀普通口座	¥1,771,621
合計	¥11,605,526	合計	¥11,771,621

*建築学科創設35周年記念奨学金として運営予定。

第30期(1995年)一般会計予算(案)

収入	支出		
a)前年度繰越金	¥1,982,658	1)会誌発刊費	¥1,480,000
		(1) ニッチNO.19印刷費	¥1,030,000
		(2) 編集費	¥440,000
		(3) 雑費	¥10,000
b)会費	¥4,150,000	2)各研究室通信費	¥30,000
		(1) OB会活動通信費	¥30,000
c)総会発送援助費(校友会より)	¥917,318	3)同窓会名簿整理費	¥1,917,000
		(1) 印刷費	¥1,700,000
		(2) 整理費	¥180,000
		(3) 郵送費	¥27,000
		(4) 雑費	¥10,000
d)雑収入	¥2,500,000	4)総会費	¥2,834,900
(1) 同窓会名簿売上	¥600,000	(1) 総会通知印刷費	¥234,000
(2) ニッチ編集、発送費	¥700,000	(2) 総会通知発送費	¥2,500,900
(3) 賛助金	¥700,000	(3) 雑費	¥100,000
(4) 懇親会会費	¥500,000		
e)銀行利息	¥10,000	5)懇親会費	¥1,813,900
		(1) 案内印刷費	¥148,500
		(2) 案内発送費	¥765,400
		(3) 懇親会費	¥800,000
		(4) 雑費	¥100,000
		6)準会員への援助費	¥800,000
		7)特別講演会援助費	¥300,000
		8)本部費	¥100,000
		9)予備費	¥284,176
合計	¥9,559,976	合計	¥9,559,976

ここ数年間お願いしてまいりました編集・発送費は、同窓会会員が増えているにもかかわらず、今年も大幅に落ち込みを見せております。皆様の編集・発送費はいまや「NICHE」の発行を続けるためには欠かせぬ財源になっております。発送を含めると、本会の予算の大半をこの事業に費やしていることとなりますが、収入源の大半が現役の学生の終身会費(1人10,000円)の納入に頼っている現在、増加の一途である会員数を考えますと、経費がまかなえない状況になっております。卒業された方々のための事業の大半がこの発刊です。なにとぞよろしくご協力のほど、お願い申し上げます。また、賛助金も在学生と同窓会会員との交流を深める目的の合同懇親会や学生活動の援助として特別講演会や準会員への援助等に必要な財源のひとつとなっております。あわせてご協力のほどお願い申し上げます。

これまでにご協力いただいた賛助金の額は下記の通りです。

1986年度 総額	702,000円	(351口 309人)
1987年度 総額	712,000円	(356口 226人) (ニッチ12号p.34参照)
1988年度 総額	733,000円	(365.5口 261人) (ニッチ13号p.36参照)
1989年度 総額	1,059,000円	(529.5口 298人) (ニッチ14号p.34参照)
1990年度 総額	928,500円	(464.25口 268人) (ニッチ15号p.29参照)
1991年度 総額	987,000円	(493.5口 256人) (ニッチ16号p.32参照)
1992年度 総額	864,000円	(432口 264人) (ニッチ17号p.30参照)
1993年度 編集・発送費	544,000円	(272口 270人)
賛助金	598,000円	(299口 224人) (ニッチ18号p.34参照)
1994年度 編集・発送費	554,000円	(277口 277人)
賛助金	766,000円	(383口 242人) (ニッチ19号p.33参照)
1995年度 編集・発送費	648,000円	(324口 324人)
賛助金	919,000円	(459.5口 311人) (ニッチ20号p.36参照)

1996年版同窓会会員名簿頒布のお知らせ

1996年版同窓会会員名簿

同窓会会員頒布価格 5,000円 (送料を含む)

会員外頒布価格 30,000円 (送料および協力費25,000円を含む)

なお、送金は同封の同窓会宛振込用紙を利用し、必ず表面に「名簿代5,000円」「名簿代+協力費=25,000円」と記入して下さるようお願い申し上げます。この記入がないと、全額「会誌の編集・発送費」とみなされてしまいますので、必ずご記入下さい。

STEC年版同窓会会員名簿頒布のお知らせ

工学院大学校友会では、広く卒業生の皆様に「工学院大学校友会STECカード」の加入を呼びかけております。このカードは校友会が企画するもので、VISAかマスターが選べます。ぜひ母校のマーク入りのカードをお使いいただくようお願いいたします。

各種サービスとして

- 住所変更の手続きがカード会社を通じて自動的に連絡され、「同窓会名簿」の変更や各種のお知らせの郵送に活かされます。『NICHE』の発送など、各種情報が正確にご連絡できます。
- カードご利用代金の一部(約0.3%)が校友会に還元されます。これは奨学金などに活かす予定です。
- その他、会員が増えることでさまざまな特典が計画されています。

以上のメリットをご理解いただき、ぜひ工学院大学校友会STECカードにご加入ください。

お問い合わせ、入会申し込みは下記まで

工学院大学校友会事務局

〒160 東京都新宿区西新宿1-24-2 tel. (03) 3342-2064

工学院大学建築学科同窓会誌
NICHE
vol.20
1996

NICHE